

ただそれだけの物語

もっち～！

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時空管理をしている組織から派遣されたオリ主。違法なタイムリープを繰り返す『死に戻り』の少年を排除する為に…そこで知り合った男装の麗人と…ただそれだけの物語。

# 目次

出合いは突然に	1
入れ替わり	9
しばしの別れ	24
SS：盗品蔵にて	38
禁断症状	44
SS：寝込みを襲う黒き女	56
フェルトの興味	61
報復	75
呼び出し	85
忘れられた存在	100



# 出会いは突然に

大きな寝室に肉の叩き合う音が響く。

「あうー」

達したようだ。彼女の表情が、恍惚でありながら、柔らかな表情へ変化していく。余韻を愉しむ彼女の胸と戯れる。達した為、くたびれたようにしおれている乳首は、刺激により力強く立っていく。まだ、欲しいのか？この女体は…まったく、貪欲だな、彼女は。

「ねえ、ずっと、ここにいても良いのよ」

潤んだ瞳で僕を見つめる女性、クルシユ・カルステン。この国の王候補の一人である。普段は、軍服を着て男装し、凜とした佇まいを漂わせている。ただ、僕と彼女の腹心であるフェリスの前だけ、女性に変貌するようだ。

「そもいかない。僕の主から密命を言い渡されている。もし、この救いのような無い戦乱の時代が終わったら、二人で暮らすのも悪く無いな」

「うん♪がんばる…だから、困ったら、いつでも頼ってね」

僕に甘えるように縋り憑く彼女。

「わかった。そうだ…これを上げる。指を出して♪」

左手を出す彼女。

「右手だよ。左では結婚指輪になってしまう」

「それでもいい」

左手を僕の前に差し出す彼女。そんな彼女の右手の薬指に指輪を嵌めた。

「お守り程度だよ」

嵌めたばかりの指輪を、愛おしそうに撫でる彼女。

「さてと…そろそろ行くよ」

今日、アレが起きそうである。何者かが、この世界へ転移してきたようだから。

「また、逢えますよね？」

「ああ…たぶん…じゃ、行つて来るよ」

上半身だけ起こした彼女が、僕を見つめている。そんな彼女の唇へ、しばしではあるが、お別れの口づけをした。彼女の腕が僕の首に巻き付く。僕をどこへも行かせないよ  
うに…

コンコン！

—— クルシユ・カルステン ——

コンコン！

ドアのノック音、それに一瞬、気を取られてしまった。

「クルシユ様、朝食の準備が出来た」

「ああ、わかった。着替えて、すぐに参る！」

ドアの方を向き、召使いの者に返答をした。そして、彼の方へ首を動かすと、既にいなかった。もう、行ってしまわれたのですね…

彼と会ったのは、街中であつた。フェリスを帯同してのお城からの帰り道だ。

「うん？君…病気だな」

フェリスに向かって、いきなりそんな言葉を吐いた。

「何をいつているの？これでも僕は、最高位の治癒術師という立場だよ。そんな僕が病気だつて?!何を言っているのさ？」

「うくん…あまり知られていない病気だよ。病名は性同一性障害。身体と心で性別が違う精神性の疾患だよ」

フェリスは目を見開いて彼を見つめた。確かに、彼は見た目も行動も口調も女性であるが、れつきとした男性であつたから。それをすれ違い様に、見抜いたようだ。

「ど、ど、どうしてそれを…」

「先祖還りか？その猫耳は…」

フェリスの頭を優しく撫でる彼…フェリスは…彼に…彼の腕に頬を擦り合わせている。マーキング…彼の先祖である猫耳族が、自分の居場所にする為の行為だ。頭を撫でただけで、警戒心が強いフェリスの心を、一瞬で掴んだようだ。

「君は心が疲弊しているようだな」

え…往來で私に抱きついて來た彼。私は拒否すること無く、その行為を受け入れている。そして、自然に涙が零れていく。どうして？

「辛いことや悲しいことは、涙を流すことで、軽減するんだ。それは、人間の本能だよ」彼の頬が私の頬に重なる。心地良い…肌と肌との触れ合い…スキンシップ…もう何年もしていない。こんなにも心が和らぐものだったのか。

「落ち着いたかな？じゃ、僕はこれで…あれ？」

彼は立ち去ろうとしたが、フェリスが彼の背中に抱きついて離れないでいた。

「ちよつと、離れてくれる？」

「いや〜♪逃がさないからね♪」

こんなフェリスを見た事無い。笑顔で彼につきまといついているし。

「いや。逃げるも何も…僕は単なる通り糺りだつて…」

「クルシユ様、彼を持ち帰っても良いですか？色々訊きたいです♪」



頷いた私。私ももつと……

屋敷にしばらく逗留してくれた彼。屋敷の者達は、彼を警戒していた。何者か判らないから。それは当然の行為である。だけど、日を増すごとに、彼への警戒は、彼への敬いに変わっていった。彼は、フェリスにでも判らなかつた、家人達の些細な怪我や病氣を見つけ、治癒してくれたのだつた。

「フェリスも形無しだな」

「う〜ん、悔しいけど、勝てませんねえ〜。つて言うか、勝つ気が無いですし♪」

フェリスは彼といるのが嬉しそうだ。

ある時、フェリスの首に首輪のような物が嵌められていた。

「どうしたの、これ？」

「彼に貰いました♪ネットワークスだと、戦闘のジャマになるから、首の防護を兼ねて、この首輪を頂きました」

とても嬉しそうに言うフェリス。羨ましい……私にはくれないのか？

出逢つて、この家に連れ込んだ日から、夜は私の床で一緒に過ごしてくれた。彼との添い寝は、朝の目覚めがとても気持ち良い。彼とのスキンシップ……全身の疲れが解けて



んな彼の姿は珍しい。

「でも、戻って来てくれるわ」

彼に貰った指輪を皆に見せた。

「婚約指輪ですか……ズルい！」

フェリスが噛みついてきた。私と二人っきりの時はともかく、家人達の前でのこの行為は珍しい。

「何を言っているの、あなたも貰ったでしょ！」

彼女の首輪を指差した私。

「あああ、てへへへ♪」

照れ笑いを浮かべるフェリス。完全にフェリスの心を掴んだ彼。

「で、彼の名前は訊いたのですか？」

従者であるヴィルヘルムに訊かれた。

「訊けなかつた……訊いたら消えてしまう恐怖が……」

彼の名前を知らない私達。皆が、彼との過ごす時間を惜しむように、彼に名前も正体も訊いていなかつたのだ。不思議なことだが、何時の間にか『訊いたら消えちゃう』つて、そんな共有した思いが、私も私の従者の者達にも芽生えていた。

「彼と再会したら、名前を訊きます。私が訊きます。いいですね?！」

特にフェリスに向けて宣言をした。

## 入れ替わり

中世ファンタジー世界の街並。馬車ならぬ龍車が往来を行き来している。家々の前には露天店が並び、市場が形成されており、そこには民衆で溢れ、活気に満ちた街並である。

ある民家の扉の前にある階段に座る、場違いな恰好の少年を見つけた。上下ジャージ姿である少年。この街、いや、この世界の文化にそぐわない出で立ちである。

「ナツキ・スバルだな？」

僕が声を掛けた。

「なんで、知っているんだ？なあ、ここはどこだ？俺を元の世界へ帰してくれ〜！」

立ち上がり、僕に掴み掛かるスバル。

「まあ、落ち着けよ。君の能力のことを知っている。既に数回死んでいるだろ？こうして会うのも2回目だよ。前回は、僕の言った事が信じられないで、ここから逃げて…」

僕を睨みつけるスバル。

「俺の能力って…」

言いかけたスバルの口を塞いだ。

「ああ、君が口にすると、君は死ぬ。そして、また、あの階段に座っているところから、始まるんだよ」

思い当たったのか、項垂れるスバル。

「君の能力は『死に戻り』だ。君が死ぬ事で、この世界全体が、セーブポイントと呼ばれる選択肢の時間まで戻されるんだよ」

「記憶は？俺の記憶だけリセットされないのか？」

「いや、君と僕はリセットされない」

「お前は何者だ？」

「君が『死に戻り』しないようにガードする役目だよ。迷惑なんだよ、君みたいなタイムリーパーはね。時空を管理する者として、看過出来ないんだ。かと、言つて、君を殺しても解決出来ない。君を元の世界へ戻してあげてもダメだったよ」

「ダメだった？俺にはその記憶は無いぞ！」

「ここと並行する世界で試したんだよ。君がこの世界を離脱した時点で、死亡扱いになった」

「なんだって…」

力無く地面に座り込むスバル。

「で、数ある並行世界で、君が一番遅い出発でね。ある実験をしに来たんだ」  
「実験だと？」

「そうだ。協力してくれるよね？もう死ぬのはイヤだろ？」

スバルが頷いた。

「ダメ元であるのを理解していてくれ」

「わかった……」

スバルを人目の付かない場所に連れ込み、僕達を結界で封じ込めた。これで部外者立ち入り禁止になる。

「テスト内容は、君の完全コピー体を作り、君を元の世界へ、コピー体をこの世界に置く。そんな感じだよ」

「わかった。やってくれ」

途中でジヤマされるのは心外なので、スバルの意識を狩り取り、それからスバルの完全コピー体を創造した。これで第一段階クリアである。次に本物のスバルを元の世界へ転移させた。何も起きない：第二段階クリアだ。問題はここからである。コピー体から魂を抜きだし、魂生箱へ入れた。この箱の中で魂は生き続けられるのだ。暫く待つも、何事も起きない。第三段階クリアだな。そして、コピー体を消去して、箱は僕が隠し持つ。ここで結界を霧散させた。どうか？

時間の揺らぎは感じられない。スバルのいた階段には、スバルはいない。これでいいのか？次に：彼女と接触だな。ナツキ・スバルが生きているように見せかけないといけない。しばらく僕が彼になり、タイムリセットが起きないかを検証しないとダメなのだ。

街の往来に馴染めない少女を見つけた。彼女からスリが何かを掠め取った。僕は『強奪』で、それを奪い返す。スリには紛い品を『譲渡』して、奪い返した事実の発覚を遅らせる小細工を施した。

「君、今スリとられたよ」

彼女にスリ取られた物を見せた。

「えっ！それ…大事な物なんです…ありがとうございます」

僕に頭を下げる銀髪のハーフェルフの少女。エルフ系は苦手なんだけど…仕事だからな…

「これはこうしてあげる。盗まれないようにね」

ペンダント状態にして、彼女の首にかけてあげた。

「あ…重ね重ねありがとうございます。私はサテラと申します」

紫紺の瞳で僕を見つめているエミリア。

「僕はナツキ・スバルと申します。エミリア様、よろしく申し上げます」



はつとした少女。

「どうして…私の名前を…」

その表情は恐怖に歪んでいる。

「僕は相手の心が読めます。ダメですよ、僕を遠ざける為に、魔女の名を騙っては」

「ああ、そこまでバレているんですね…」

「宿まで送ります。先程から、あなたを見張っている一団がいますので。ああ、きよろきよろしないでください」

「はい♪」

えっ！僕の腕に躊躇無く抱きつくエミリア。おいおい、初対面でそこまで打ち解けるなよ…エルフに好かれる傾向にある僕は、少し凹んだ。

エミリアの道案内で宿屋へと向かう。人通りが少なくなると、追尾してきた一団に取り囲まれた。

「おい！その女を引き渡せ。ソイツは魔女だぞ！」

みんな手に物騒な物を持っている。

「魔女？君達は、彼女が魔女に見えるのか？目が病気じゃないのかな？」

「貴様！魔女に洗脳されたのか？」

僕が洗脳？有り得ない。迷わず、彼ら全員の心臓を重力狙撃した。これは、一点だけ

を押しつぶす術である。エミリアの前で、血なまぐさい場面は、そぐわないから。その場で崩れるようにして倒れていく一団。彼らから財布と紙類と金属類などを『強奪』しておく。後で、黒幕を探る為である。

「さあ、エミリア、先を急ごう♪」

「何が起きたのですか？」

「気にしすぎると、額に皺ができるぞ♪」

僕の言葉で、額を確認するエミリア。ああ、この世界でも天然系のようだ。

「大丈夫のようです。ああ、こちらです」

この子は苦手なんだが…仕事だからなあ…気の進まない僕。

宿屋に着き、エミリアの部屋に入ると、青髪 of 鬼族の少女がいた。僕を見るなり、警戒心を強めていく。

「エミリア様、その青年は、どなたですか？」

「ナツキ・スバル様です。助けて頂きました」

僕の腕に更に強く抱きついて来た。胸の感触は悪くない。だが、関わり過ぎると、後が面倒なんだが。

「エミリア様、スバルとお呼びください。レムも同様にそうしてくれるかな？」

青髪の少女がはつとして、僕を見てきた。

「どうして…私の名前を…それにそのオーラは…」

「僕は相手の心が読める。オーラか？君と同じオーラを半分持っている」

「ハーフなんですか？」

「そういうことだよ、レム♪」

同族系とわかり、警戒を解いたレム。

「お前は何者だ？」

エミリアから灰色毛の猫らしき物が出て来た。

「なんだと思う？。パツク♪」

猫らしき物を抱き締めて、モフモフ感を味わう。

「なんで、僕の名前まで…え…そんな馬鹿な…」

パツクにだけ、僕の正体のヒントを流し込んだ。

「嘘だろ…」

驚愕な表情で僕を見るパツク。

「パツクは僕の敵かな？味方かな？どっちがいい？」

パツクの身体が硬くなっていく。そんなに緊張しなくてもいいのに。オスには興味は無い。

「味方でありたい……」

絞り出すような声で返答してきたパツク。

「良い選択だよ。ここで退場でも、いいんだけどね」

オーラを通常の物に戻した。

「なんで、ここにいるんだ？」

「ちよつと介入したから、事後確認中だよ」

「そうか……エミリア……この方を仲間にするんだ。護つてくれるから」

つて、エミリアに助言してくれたパツク。こいつは、エミリアの使い魔のような契約精霊である。

「パツクの知り合いなの？」

エミリアが訊いた。

「知り合いでは無いけど……この方の噂は耳にしている。鬼畜だけど、情に脆いとか……女体好きだけど、女性の甘えには弱いとか」

おい！僕の事実をばらすなよ……行動しにくくなるだろうが！営業妨害だぞ！

「女体好きって何ですか？」

エミリアの質問に固まる僕、パツク、レム。

「パツクが説明しろよ。お前が言ったんだからな」

モフモフしていた。パックを、エミリアの耳元に置いた。パックがゴニョゴニョと説明を、ストレートな表現でしているせいか、エミリアの顔が茹だつて行く。

「え……あの……私なんかで……役立てますか？」

その言葉に固まる僕、パック、レム。パック：コイツは何を説明したんだ。

「いや……まだ幼いから……無理かな……」

本当の理由はエルフ系だからだ。でも、そんな理由は差別になるから、ダメだよな。

「レムはどうですか？」

真つ赤な顔のレムが訊いてきた。

「お気遣いだけで……あと2年くらいかな？」

「がんばりますよ♪」

何をがんばるんだ？

夜……何故か、ベッドの上でエミリアとレムに挟まれている。所謂添い寝である。なんか、子供達と寝ている気分だ。僕の放つ『癒やし』のオーラの為か、二人ともスヤスヤと寝ていた。

僕は、あの一団から奪った物を精査していく。財布を1つずつばらして、隠している物が無いかをチェックする。紙類も総て目を通すが、黒幕を示す証拠は無かった。記憶

を読めば良かったかな？相手の頭に手を翳すと、記憶が読める場合があるのだ。が、あの場合、エミリアが腕を抱いていたから、無理だったもんなん。はあく。

朝、柔らかい物の感触で目が覚めた。レムの唇が僕の唇に重なっていた。僕と目が合うと、レムは真つ赤な顔で、唇が遠ざけていく。

「レム、おはよう。ありがとうな。モーニングキス♪気持ち良かったよ」

「あ…気持ち良いなら…良かったです…朝食の準備をしますので…これで…」

真つ赤な顔で部屋を出て行ったレム。エミリアは隣でスヤスヤ寝ている。あれ？パックもか？ガードにならないだろうに。一人と一匹を起こさないように、ベッドから抜け出した。

エミリアが、お城へ向かうと言うので、お供をする。で、お城で、彼女と再会した。

「クルシユ、元気だったか？」

「え…どうして、ここに…」

驚いているクルシユ。僕を見つけるなり、僕の腕に抱きついてるフェリス。

「え？クルシユさんと知り合いませんか？」

エミリアに訊かれた。

「まあ…彼女…」

事実を答えた。真っ赤になるクルシユ。驚いて僕を見るエミリア。

「どうして、私に仕えているんですか？」

エミリアに訊かれた。

「エミリアのガードが、お仕事なんだよ。クルシユとはプライベートなお付き合いだし……」

「あなたの密命って……」

クルシユに訊かれた。

「そう、この子のガード。だから、クルシユの傍に、一緒には居られないんだよ。ごめん……休みの日には会いに行くから♪」

耳元に近づき、クルシユの耳タブをハムハム。

「え……ここでその様なことは……お止めください。そういうのは二人の時に……」

クルシユの顔がゆで上がっていく。ああ、そうだった。他人の目のある場所では、男装の麗人だったな。

「すまない。旅立って2日くらいだったけど、クルシユに触れなくなっていたよ。ごめん」

クルシユに謝る僕。

「ねえねえ、僕には？」

フェリスに訊かれた。

「お供の者は待合室にかな？ だったら、待合室で♪」

「残念だけど…お供はそれぞれの仕える候補者の後で、待機なんだよね〜」

とつても残念そうなフェリス。

「じゃ、また今度だな、フェリス」

彼女、いや、彼の額に口付けをした僕。

「うん♪約束だよ」

「ああ」

謁見は無事に終わった。王候補の者達に、注意事項とか、色々話があった。内容は興味無いので覚えていない。

「エミリア…疲れたよ〜」

「はい♪お宿に戻って寝てください」

エミリアが僕の腕に抱きつき、頭を肩にチョコンと載せて、甘えてきた。

「待て！」

帰ろうとした僕達を、クルシユが止めた。

「胸枕で寝ていい？」



僕の言葉で、真つ赤になるクルシユ。相変わらず、かわいいなあ。

「だから……そういうのは、二人の時に……言ってください……」

クルシユの口調が壊れてきた。男装の麗人でいないとイケナイのは、つらいだろうな。

「クルシユ様、ほら、訊くことを訊いて下さい。やらないなら、僕がしますよ」

「ダメだつて！私がします。お前の名前はなんと言うのだ？」

「うん？婚約者の名前を忘れたのか？僕はナツキ・スバルだよ。スバルと呼んでくれ」  
忘れるも何も、クルシユには名乗っていかなかったなあ。

「スバル……わかったわ、スバル！我が屋敷で休んでいくか？」

婚約者と言ったのに、そこには突っ込まないのか？

「いや、取り敢えず、エミリアを宿まで連れ帰るのが、僕の仕事だ」

残念そうなクルシユ。

『後で、行くよ』

クルシユだけへ念話を飛ばした。

「え！わかった！」

安心したのか、男装の麗人に戻っていくクルシユ。

「君がエミリア様の新しい騎士か？俺と勝負しないか？」

一段落すると、知らない男に声を掛けられた。誰だ、コイツ？

「フェリス、コイツは誰だ？」

「私のスバルきゅんに何をするんだ？おい、ユリウスよ！」

ユリウス・ユークリウス：アナスタシア・ホーシン候補の騎士のようだ。

「フェリス：彼の実力を知りたいと思わないか？」

「知っているから、問題無いよ、ユリウスより強いし♪」

フェリス、焚きつけるなよ。僕は疲れているんだ。

「悪いけど、男に興味は無い。ああ、フェリスは別だ」

「差別は良く無いよ。君も騎士なんだからなあ」

性差別したつもりは無い。これは僕の好みの問題である。

「わかった。二度と僕の信念をジャマ出来ないようにしてやる」

ユリウスと二人で競技場へ向かった。心配そうに僕を見つめているエミリア。ユリウスの勝ちを信じているアナスタシアは、余裕の表情である。

「さあ、剣を構えた給え！」

僕の戦闘スタイルにケチを付けて来た。居合抜きの為、剣を構える必要が無いのに：この世界では、剣を構えないとダメなのか？なら：僕はバトンソードを手にして、オーラを送り込む。このソードはバトン状であるが、送り込むオーラの属性に対応した刃が

発現する優れ物である。ライトセーバーをイメージして貰うと良いかな？

「うん？変わった剣だな」

「始め！」

審判らしき者の声、瞬動術でユリウスの懐へ飛び込み、バトンソードを撤収させて、正拳突きを腹部へめり込ませた。

「うっぐお！」

その場で血反吐を吐いて、倒れるユリウス。

「なんだよ。一発でお終いか？なあ、フェリス。眠いよ〜」

「もう、スバルきゅんたら〜」

フェリスの肩に支えられて、エミリアと共に、クルシユの屋敷へ向かう。マジに眠かったのだ。「ダメだよ、そこで寝ちやく〜」ってエミリアの声が遠くで聞こえる。僕はどこで寝たのだろうか？

目が覚めるとベッドの上だった。両隣にエミリアとフェリスがいて、二人共僕の腕を抱き締めてスヤスヤ寝ていた。これでは、安眠抱き枕状態では無いか…

そうだ♪クルシユの元へ行かないと…

## しばしの別れ

クルシユの元へはせ参じた僕。彼女は僕に甘えまくっている。男装の麗人として振る舞うには、無理が来ているのかも知れない。

「ねえ…エミリアと行っちゃうの？」

僕の上から訊いてきた。

「彼女の騎士だからね。彼女を送り届けないと…」

「暫く逢えないの？」

僕の胸に頬を重ねている。僕の前だけでは、普通の女の子になろうとするクルシユ。

「いや、本当に困った時には戻って来るよ。ソレよりも、裏でエミリアが王になるように

動いてくれないかな？」

目を見開いて驚いているクルシユ。

「だって、この世界が平和になったら、僕と僕の世界へ行くんだろ？君が王になったら、

一緒に行けないよ♪」

「あつ！そうですよね…困った…」

本当に、一緒に来る気があるようだ。

「エミリアにクルシユの実現したことを頼むんだよ。エミリアのしたいことと、相反しないと思うからさあ」

考え込むクルシユ。

「まあ、この世界に居座るのも有りだよ。王を引退した頃に迎えに来るから」

「それだと…ヨボヨボになりそう…」

「なるだろうな。下手すると死ぬまで引退出来ないだろうし」

「たまに、遊びに来てくれる？」

「約束は出来ない。僕としては、あまり来たくない世界だから」

あのピエロのおっさんと、おかつぱの司祭は会いたくない。

「そんな…」

「時間はまだある。考えておいてくれ」

クルシユの額にキスをした。

「あの…口に…欲しいです」

「お預け…なんてね」

一瞬泣きそうな顔になったクルシユの唇に、僕の唇を重ねた。

「もう…いじわるですね♪」

クルシユの方からも、唇を重ね、舌を…

翌日、クルシユが龍車をくれた。こういうのって高いんじゃないの？

「こんな高価の物は貰えないよ」

「いいのよ！持って行きなさい。後、龍を選びなさい」

男装の麗人のクルシユ。気分が良い。貰える龍の候補を見て廻ると、僕をガン見していつる龍を見つけた。コイツにするかな。

「この子にする」

「一番気性が荒いけどいいの？」

「ああ、寝けるからいいよ。名前は？」

「パトラツシユト」

フランダーズの龍か？クルシユが嬉しそうに名前を付けてくれた。では貰っておくか。パトラツシユを龍車に装着して、エミリアを乗せて、僕は御者台に乗り、クルシユのお屋敷を後にした。

——クルシユ——

行ってしまわれた…しばしのお別れ。たぶん、次に会う時には、お返事をしないとダメだろうな。

「どうされましたか？」

ヴィルヘルムに訊かれた。彼に言われたことを正直に話した。

「そうですか…：そのようなことを…」

ヴィルヘルムが、彼なりの考えを纏めているようだ。

「そうですね。彼の言う通りですよ、クルシユ様」

言う通り？

「彼はクルシユ様の抱えている問題を見抜かれた。そして、提案をされたのです。クルシユ様にとっての幸せとはを、考えた方が良いかと思えます」

私にとつての幸せかあ…：王になることで、私は幸せになるのだろうか？領地の民達、家臣達を良い方向へ連れて行けるはずではある。だけど…：彼とは…

「クルシユ様、どうされましたか？」

フェリスに訊かれた。ヴィルヘルムに言われたことを話した。

「そうですね。民達、家臣達の幸せがクルシユ様の幸せなら良いじゃ無いですか。私は、クルシユ様が王になられたら、スバルきゆんに付いて行きますよ♪」

えっ！裏切りじゃないのか…：主君を置いて、行っちゃうのか？

「私の幸せは、スバルきゆんと一緒にいることです」

私だって…

「そうですか…では、私はクルシユ様の分も、寵愛を受けようと思います」  
とても嬉しそうなフェリス。

「ズルい…」

涙が目尻から溢れ出していく。そんなのズルいつて…

「ふふふ♪本音が出ましたね。良いんじゃないですか？本音のままに生きるのも。領民、家臣の犠牲になることは無いですよ。同じ志を持つてくれる王がいるなら、彼女に丸投げも悪く無い選択ですよ」

なるほど…それでも良いのか…

——スバル——

宿屋を引き払い、レムを拾って、エミリアの後見人であるロズワール家へと向かった。

ロズワール・L・メイザース。ロズワール家の当主である。道化の化粧を施した腹黒い男である。こいつは苦手である。宮廷筆頭魔術師でマナの量は無尽蔵であり、接近戦もこなせるスパーパー戦士である。

「レム！手綱を頼めるか？」

「どうしました？」



「追っ手がいる。いいか？僕が戻るまで、止めずに走らせるよ」  
「わかりました」

エミリアをレムに託し、僕は追っ手のお掃除をする。

「おい、貴様！魔女に心を買った騎士だな？」

「魔女教の信者さんに言われるのは心外ですけど」

『強奪』を発動して、追っ手の者達の持っている魔女の福音書を奪い、目の前で灰にして上げた。この福音書は、TODOノードみたいな物で、何をすべきかが書かれているのだ。

「何をするのだ？このバチ当たり目！」

まあ、バチ当たりなのは、間違いない。チートではあるが、福音書がなくても、だいたい何が起きるかを知っているし。福音書の無い信者は、一般人と同じになるので、放置した。

レムの隣に転移した。

「ただいま♪」

「お怪我は無いですか？」

「レムの笑顔を見れば、大丈夫♪」

「はい」

笑顔を見せてくれたレム。

夜間はレムをエミリアの隣に寝かし付け、僕だけ御者台に残った。レムには睡眠が必要だから。

そして、漸くロズワール家の屋敷に着いた、

「君がナツキ・スバル君ですか〜?」

コイツの話し方はふざけている。道化師を演じているだけで、実は冷徹な男である。並行世界で、コイツと対峙したことあるし。たぶん、この世界でも、そうなるんだろうな。コイツ、基本的に嫌いだし。

「エミリア様の騎士で、ナツキ・スバルと申します」

『強奪』で、コイツの福音書を奪い、こっそりと灰にした。

「お話は、夕食を食べながらしくませんか〜」

「そうしましょう」

「レム! どうして、そんなヤツと、馴れ馴れしくしているの?」

レムのお姉様が登場した。ピンク色の髪で、レムより巨乳である。で、頭を撫でて上げる♪

「何しているの? 止めて! 勝手に触らないで…えっ!」

変化に気づいたようだ。レムの姉は鬼の角を折られている為、マナを自分で回復出来ず、あのピエロ野郎と身体を合わせることで、回復していたはず。

なので、角を治して上げました♪

「どうやって…ねえ…どうやって…」

「僕にも鬼の血は流れている。ただそれだけだよ」

「うっ…ありがとう…バルス…」

スバルなのだが、コイツは素直で無い為、バルスと呼ぶのであった。

「いいよ。同じ種族だろ？」

レムの姉の頬がうっすらと赤みを帯びていた。

夕食…旦那様が現れない。当主が現れないと、食事が出来ない。どうしたものか？

「ラムが見て来ます」

レムの姉のラムが当主の部屋へ見に行った。

「やめてくださいー！」

暫くするとラムの泣き叫ぶ声。みんなで、ラムの元へと行くと…せつかく治したラムの角が折られていた。見るからに痛そうな、折られた痕跡。

「お姉様、大丈夫ですか？」

「角が…角が…」

頭を押さえて泣きじゃくるラム。鬼は角が命に近いんだが…沸々と湧き上がる怒りのマグマ。

「おい！クソ当主よ！なんで、ラムの角を折ったんだ？」

「その女に角は不要だ」

当主の口調には、おちやらけさを感じ無い。コイツ、怒ると、素に戻るんだよな。

「それはラムの身体を自由に出来なくなるからか？」

はつとした表情のロズワール卿。

「ラム、おいで♪治してあげるから」

僕の元へ走り寄ったラム。彼女の頭を撫でて、角を治して上げた。

「貴様が、治したのか？なぜ、そんな無駄なことをする！」

またへし折ろうとするロズワール卿の前に出て、魔の手からラムを救う。

「無駄？鬼の角のだぞ？無駄な訳あるか！まあ、鬼を奴隷にする輩には、無駄な行為か？」

角の無い鬼は、本来の力を出せぬ。凶星に近い僕の言葉で、怒りを露わにしているロズワール卿。

「で、飯はまだか？」

「飯？そんな物より大事な事をしている」

本棚を探しているロズワール卿。そんな処に無いよ♪肥だめに灰を捨てたし♪

「無い…なんで無いのだ…まさか…貴様か！」

僕の方を振り向いたので、『マホトーン』を掛けておく。魔法を撃たれると厄介だから。この呪文は、相手に呪文を唱えることを出来なくする呪文である。なので、無詠唱系には効果は無い。

案の定、何かの魔法を撃とうとしているロズワール卿。しかし、魔法が出せずに、あたたかたしている。

「何をしているんだ？道化芝居か？」

「貴様…何者だ?！」

「ナツキ・スバル…エミリア様の騎士だ。それ以上でも、それ以下でも無い」

「いや、ナツキ・スバルには、そのような能力は無いはずだ！」

「なんで？無いって言い切れるんだ？初対面なのにさあ」

エミリア、ラム、レムが怪訝な表情で、ロズワール卿を見つめていた。

「書いてあったのだよ。エキドナ様から頂いた福音書にな！」

って、言って、口を押さえたロズワール卿。白白取れました♪

「なんで、魔女の福音書を持っているんだ？お前、魔女教の司祭か？」

「はあ？司祭と一緒にするな。私はエキドナ様の弟子だ！」

弟子って言い切っちゃったよ。エミリア達の表情から血の気が失せている。

「パツク、エミリアを頼むぞ♪」

「まかせろ♪」

モフモフ精霊様が現れた。

「ラム、レムは僕の後にいろ！」

「はい♪」

「貴様！何者だ？どうして、パツクすら味方になっているのだ！」

「その福音書には、書かれていないんですか？万能では無いんですね♪」

「侮辱するな！」

瞬動術で僕の懐に入ろうとしたロズワール卿。だけど…

「うぐっっ！」

ロズワール卿の右手が切り落とされた。僕の隣に、聖剣を手にした仲間が転移していた。

「悪いけど、兄さんに危害は与えさせないよ♪」

「おい！僕は、お前の兄だと、認めていないぞ、ヤマト！」

仲間にも怒りの声を浴びせた。僕の弟と名乗る仲間。心外です。

「兄さん、照れないでも良いんですよ〜♪」

「弟だと?」

「ナツキ・ヤマトとでも言っておきましょうか。ねえ、兄さん♪」

「だから、兄じゃないって。お前、誤解をしているぞ!」

「誤解? そんなことは無いですよ。だって、兄さんの母さんから、証言は取れていますし

♪」

「この野郎! 二人共消えろ!」

ロズワール卿が、剣を手に斬り掛かってきた。

シュッパ!ゴトン!

僕の持つ魔剣で、ロズワール卿の左腕を切り落とすとした。

「何…お前達…なんでそれを持っているんだ…」

両腕を無くしたロズワール卿が訊いてきた。

「それって?」

「ああ、僕のエクスカリバーと、兄さんのダークエクスカリバーのことでは無いですか

?」

ヤマトの言葉に頷くロズワール卿。

「どうして持っているんだ? はて?」

いつ、どうやって手に入れたかを覚えていない僕。

「そんな昔の事は覚えてないですよ」

って、ヤマトも覚えていないようだ。

「お前ら…まさか…」

何かに気づいたロズワール卿は、ヤマトの能力で、闇の世界へと引き込まれて行く。

「お前達…闇属性か…」

スルーすると、ロズワール卿の斬り落とした腕だけが残った。

ロズワール卿がいなくなり、今後の後盾と財政をどうするかを話し合った。

「財政は僕のチームで利殖させていきますので、心配はないです」

って、ヤマト。コイツのチームにはスーパーコンピュータが2台いるからな。

「問題は後盾ですね」

どうするかな…ロズワール卿が意外に早く退場してしまったし。

「僕達の所属している騎士団の団長に、後盾になってもらいましょうか」

って、ヤマト…それって…ダメだろう…

「あの鬼畜か？」

って、パツク。頷くヤマト。



「まあ、良いんじゃないか？あそこにケンカ売る勢力は無いだろうし」

って、パツク。おい、断れ！断固拒否しろ！

「じゃ、兄さん、そういうことです♪エミリアさん、今後、僕達の騎士団の団長が後盾になります。だから、安心してください」

って、ヤマト…ダメだって、鬼畜だぞ！女体好きだぞ！

「その方は、すごいのですか？」

って、エミリア。

「人間では無いので、人間的に出来ているとは言えませんが、まあ、概ね、エミリア様なら、被害が少ないと思いますよ♪」

それは苦手の上、対象外ってことだな。

「その方も、女体好きなんですか？」

「はい♪大好きですよ♪」

って、ヤマト…てめえ〜！

翌日から、屋敷周辺の魔女教徒狩りを、僕達の騎士団主導で行った。まあ、村が平和になるのは良いことではあるが、僕がエミリアの騎士である必要はあるのだろうか？

## SS：盗品蔵にて

フェルトは恐怖に飲み込まれて居た。目の前では、自分を庇う為にロム爺が両腕を切り落とされて、床に倒れている。

「どうしたの？代金を受け取りなさいよ。死出の旅路のお代よ」

取引相手のエルザが、約束のお金の代わりに、自分達の口封じを仕掛けて来たのだ。た。

フェルトの全身はロム爺の吹き出した血液で塗れており、彼女の目は既に死んでい

る。

「何？もう、精神が壊れたの。じゃ、今楽にしてあげるわ」

エルザが手にしたククリナイフを、フェルト目指して振り下ろした。

カッキーン！

金属と金属がぶつかり合う音、エルザが後に下がった。彼女の前に新敵が現れたのだ。

「貴様、何者だ？」

「エミリア様の騎士……ナツキ・ヤマトだ」

「エミリアの？あの小娘に騎士がいたのか？訊いていないぞ！」

エミリアとはフェルトが紋章を盗んだ相手である。

「ああ、極秘だからな」

見た目17歳くらいの少年が、笑みを浮かべた。それが、無性に腹が立ったエルザ。

「貴様、ここから生かして出さぬ！」

「それは、こっちのセリフだよ。お前みたなのがいたら、エミリア様に害を為すからな」

『ダークフォール』

少年が能力を発動した。エルザの足元に闇が生じ、エルザを飲み込み始めた。

「何？これはなんだ？」

経験したことのない恐怖がエルザを襲った。

「お前を闇の世界へご招待だよ。闇の牢獄で無になるまで禁固刑だ」

エルザは少年の目に狂気を見た。自分よりも狂っている者を見た感じである。

「落ち始めたら、闇属性以外の者は、まず助からない」

「お前…狂っている…闇属性だと…」

「ああ、闇に染まっただけの奴は、闇属性では無いぞ。お前のような奴だよ」

エルザの身体は腰まで闇に飲み込まれた。

「貴様！」

手にしていたナイフをヤマトに向かって投げつけた。だが、ナイフは消失した。

「お前の持つている物は、闇の世界へ持ち込む。お前が無になった後、回収してやるよ」  
「お前は、闇の世界を出入り出来るのか？」

「ああ、闇属性だからな。そもそも、闇の世界の王は、兄さんの息子だし♪」

「なんだって…貴様、闇からの刺客か…」

エルザは完全に闇に飲み込まれ、この世から消えた。

ヤマトは、フェルトの精神を治癒していく。治癒術は得意では無いが、出来ない訳では無いから。静かに寝息を立て始めたフェルトをカウンターのの上に寝かせ、次にロム爺の腕を修復していき、回復術で生命力を元に戻した。

「助かった…儂は皆からロム爺と呼ばれている。その子はフェルトと言うんじや。お前の名はなんつて言うのだ？」

「僕はナツキ・ヤマト。エミリア様の騎士だ」

「そうかあ、騎士様か…フェルトの盗んだ紋章を追って来たのだから？」

「まあ、そうですね…どうです？エミリア様を護る陣営に入ってもらえませんか？」

目を点にして驚くロム爺。

「儂らは、お前の主の大切な物を盗んだのだぞ」

「あれは、レプリカです。本物はエミリア様が身に付けております」  
「なんだって…」

「こちらも用心はしていましたが、我々の目を潜つて盗む技量、欲しい人材です。裏の情報なんかもいただけるのと有り難い。どうですか？僕の配下になっていただけませんか？」

盗人の自分達に、丁重に頭を下げた少年に、心が揺り動かされるロム爺。

「ううくん、ここは？」

カウンターの上でフェルトが目を覚ました。

「そうだ、ロム爺…」

上半身を起こしたフェルトの目に、両腕が再生されたロム爺が映り込んだ。

「治つたの？」

「ああ、彼に治してもらつた。フェルト、お前もだ」

「私も？」

「彼が、あの女を倒してくれた。エミリア様の騎士だそうだ」

「え…見付かつたの…私達はどうなるの…」

「彼の配下になり、エミリア様を護る。いいな、フェルト」

事情が飲み込めないが、ロム爺の言う事は信じるフェルトは頷いた。

「では、二人の身なりを変えてみましょう。それでは目立ちますから」

ヤマトが手を翳すと、二人の服は古びた物から、新品の物へと変わった。

「魔法使いなの？」

「魔法も使えますが、魔導戦士もどきですよ」

苦笑いするヤマト。実際のジョブは、迂闊に口には出来ない物だからだ。

「ねえ、そのエミリアつて子は、私達の望みを叶えてくれるかな？」

フェルト達の望み、貴族社会を無くし、力ある者は家柄に関係無く、登用される世界の構築である。

「エミリア様が王選で勝ち抜ければ、きつとね。彼女は魔女に似た姿なので、忌み嫌われています。ですから、裏から護つてあげてください。彼女がフェルトの望みを叶えてくださいますよ。フェルトと思いは同じだと思えますから」

ヤマトの笑顔に堕ちたフェルト。ヤマトの心意気に看過されたロム爺。二人はヤマトの配下になった。彼は、身分にかかわらず、能力に見合った全うな仕事を、フェルトの仲間達にも与えてくれ、フェルト達にも給金を出してくれた。ヤマトの配下になって、フェルトの望みは叶いつつあった。

「少なくとも、申し訳ない。エミリア様の陣営は、裕福では無いから」

「大丈夫ですよ、ヤマト様。私達から見たら、これは大金ですからね♪」

フェルトは満足げにヤマトへ笑顔を向けた。

## 禁断症状

夜、寝ている僕は、何者かに襲われた、僕を夜襲する？有り得ないだろうに。

「お前は何者だ？」

問い掛けをスルーし、問答無用って感じで、黒い女が僕を襲ってきた。閨属性の攻撃……効きませんが……何か？

「ふくん、単なる影だと思っていたけど、胸が揉めるんだね♪」

黒い女の懐に入り込み、胸を揉みながら押し倒した。

「やめろ〜！」

叫ぶ女。

「ここは、どうなっているんだ？」

股間に手を伸ばした。ふむ、人間と同じなのか。では♪

「やめろ〜！汚らわしい〜」

閨属性の黒い女に言われたく無い。

「なんで……心臓が無いの〜」



黒い女が僕に何かをしたのだが、僕に恐怖を感じ、女の声が震えている。

「戦闘特化生物なんでね、戦うことと、女体とヤルこと以外に、することが無いから、そういう面倒な臓器は無いんだよ♪」

形勢逆転したようだ。そうか、心臓にダイレクトに攻撃かあ。それは即死クラスの攻撃だわな。

「やめてください…」

もう、入っていますが…うくん、淡泊だな。そんなに気持ち良く無い。単なる筒のような感触である。そこまではコピーしていないのか。手抜きだな。

「じゃ、上の口で奉仕してくれる?」

「イヤです…ごめんなさい…」

黒い涙が零れるように見える女。だけど、涙は床に滴下はしていない。コイツ思念波か?

「僕の奴隷になれよ♪」

「なれません」

問答無用に、魔具である『奴隷の首輪』を、女の首に嵌めた。

「ふふふ、どう?性の奴隷になった気分は…」

って、女は霧散するように消えた。床には首輪だけが残っている。うくん、実体に嵌

めないと効果は無いようだ。

◇

「兄さん、襲われたんですか？物好きがいるんですね〜」

って、ヤマト。

「たぶん、あれが『死に戻り』の原因だろうな。心臓を撫でようとしていたから」

闇属性の者で無くても、心臓をダイレクトに触れば、大抵死んでしまうだろう。

「正体は何者ですか？」

「記憶が読み取れなかったよ。思念波に近いのかな。伝わって来たのは、ナツキ・スバルと一緒にいたいって、願望だけだよ」

スバルの魂は僕が預かっている。だから、僕をスバルと誤認させられたんだろうけど。どうするかな…情報が足り無すぎる。そもそも、一緒にになりたいのであれば、何故殺すのが疑問である。霊体、もしくは魂でないといられない場所にいるのか？となる。『死に戻り』をさせている人物とは別の可能性があるなあ。戻ること、生き返る訳だし。う〜ん…奥が深い事案だ。

「そうだ。魔女教の司祭は見付かったか？」

あのオカツパは苦手である。

「まだです。見付かり次第、掃除しますよ」

ヤマト共に闇の世界でのミーティングを終えて、地上へ戻ってきた。

◇

食事の後、屋敷内の探険に…ドアを開けると書庫に出た。金髪でドリルツインロールの少女が、僕の前に立ちはだかった。

「あんた、誰？」

「ベアトリス…契約をしたい。ああ、お前には拒否権は無い」

速効で、僕の仲間のベアトリスと、同化吸収させた。

「久しぶりだなんて、思わないわよ」

って、僕に抱きつき、肩車を強請る少女。彼女の希望を叶えて上げた。

「取り敢えず、この世界の書庫の本のチェックを頼む」

「アンタの願いなんで、叶えてあげないかしら」

嬉しそうに、僕の頭をペシペシ叩いている、ツンデレ妖精のベアトリス様♪

◇

次に村へ…村人達の要望を、老若男女を問わずに、一人ずつ訊いて廻る。直ぐに叶えられそうな物は、叶えていく。難しい物はエミリア達と相談だな。

屋敷に帰ると、お客さんが来ていた。

「スバル…会いたかった♪」

僕が目に入ると、僕に駆け寄り抱きついて来たお客様。

「クルシユ…どうしたんだ？まだ1ヶ月も経っていないぞ」

「会いたかった…3日くらいが限界…」

それは短すぎるだろう？せめて、1週間は保って欲しいなあ。

「フェリス、お前、止めろよ！」

「僕も会いたかったんだよ」

お前もかよ。じゃ、しょうがないか。

「会ったから、もういいか？」

クルシユが強く抱き締めてきた。帰りたくないオーラが滲み出て来ている。しばらくさせたいようにさせて、落ち着いた処で、用件を訊いた。

「エミリア様に、私の想いを譲りたい」

「え？私にですか？」

驚いたような表情で、クルシユを見つめるエミリア。

「もし、私が王になったら、エミリア様に代理執行をしてもらいたい」

「どうしてですか…」

「スバルに言われたの。私のしたいことと、エミリア様のしたいことは相反しないと。

だから、私のしたいことを、エミリア様に託したい」

それって…そういうことか？フェリスを見ると、Vサインをしてきた。

「スバル…私は、どうすれば良いの？」

「エミリア様のしたいように…つて、無責任か。是非、クルシユの申し出を受けて貰えませんか？僕の任務は、王選が終わるまで、エミリア様の騎士でいることです。終われば、国へ帰還しないと行けないのです。その時、クルシユとフェリスが同行したいと申し出ているのです」

「そうなんだ…でも、私、王になれるか、わからないよ。銀髪のハーフェルフだし…」

「だから、クルシユが王になったら、代理で執行して欲しいんだよ。その時、エミリアのしたいこともすれば良い」

「なんか、後ろめたいけど…」

困ったような表情を浮かべるエミリア。

「気にしちゃダメだよ♪」

「スバルったら…」

問題は、王選までクルシユをどうするかだ。3日で禁断症状か…これは予想外である。いや、重症と言うか。今まで自分を押し殺して来たツケが廻ってきたか？

「クルシユは、領地を留守にしている、大丈夫なのか？」

「大丈夫では無いけど…家臣達に後押しされて…」

真つ赤な顔で俯いたクルシユ。家臣達にもわかる位、禁断症状が出たのか…王選どころでは無い状況か…

「じゃ、3日に一度会いに行く。それで、いいか？」

「いいの？ねえ…」

目を見開いて僕を見つめるクルシユ。

「転移術がある。ただ、お泊まりはダメかも…」

「兄さん、お泊まりでも良いですよ。僕が代わりにエミリア様を護りますから♪」

つて、ヤマト…

「え？スバルの弟さん？」

ヤマトに驚くクルシユ。弟なんかいないんだけど…。

「初めまして、ナツキ・ヤマトと申します。兄がお世話になっております」

僕よりも常識人に見えるヤマト。ズルい…閥属性は僕よりも濃いのに。

「そうか…弟さんがいるのか…」

フェリスが獲物を狙う目付きになっている。

「フェリス、ヤマトにはいるぞ」

「え？もういるの…じゃ、スバルきゅん一筋だな♪」

男に惚れられてもなあ…あつ！そうか…

「フェリス、連れ帰る時に、お前を女にしているか？」

「目が点になるヤマト以外の者達…」

「お、お、女に…なれるの?」

「ああ、TS術をマスターしているから♪」

「いや、僕は男としての誇りが…尊厳が…」

「有る訳ないだろ?見た目、超かわいい娘なのに…男装の麗人のクルシユを見習えよ!

「そうか、イヤならいい。忘れてくれ」

「ちよつと、結論が早過ぎるよ、スバルきゆんの意地悪♪」

「こいつ、エムなのか?うくん…男のエムは苦手だぞ。」

「スバルきゆんの帰る時までには、考えておくから。勝手に結論を出さないでよ」

「あゝ!」

ラムが声を上げた。これは、珍しい…

「お帰りになるとき、私を専属メイドとして、お連れ下さい!」

僕に頭を下げたラム。レムも便乗するかの如く頭を下げて来た。

「なんか、私だけ留守番みたいな…うくん…」

「エミリアが悩み始めた。お前が王になるんだろ?おいおい…」

今夜は屋敷に泊まり、明日帰ることになったクルシユ一行。

「ロズワール卿が、ご乱心なんですか？」

姿を見せる主は、精神疾患で、療養中つてことにした。まさか、両腕を切り落として、闇の世界に幽閉とは言えないし。

「そういうことだ。で、後盾は……」

言いたくない……代わりに鬼畜が後盾になったなんて。

「兄が言いにくそうなので、僕が代わりにお伝えします」

おい！ヤマト……やめろ〜！

「エミリア様の後盾は、幽玄龍騎士団の団長が受けてくださいました」

フェリスの顔から、血の気が失せていく。クルシユは、わからないようだ。

「まさか……それって、伝説の騎士団ですよ？ 実在するんですか？」

ヤマトが頷いた。

「どんな騎士団なの？」

クルシユがフェリスに訊いた。

「噂レベルですが、化け物クラスの騎士揃いの騎士団です」

いや、噂レベルだが、正解だ。

「騎士団の団長は、鬼畜と言われていて、男は皆殺し、女子供は弄んだ上、連れ去るらし



いです」

概ね正解だ。噂レベル、恐るべし。

「どうして、そんな者を後ろ盾に？」

そう思うでしょ。僕もそう思う。

「ケンカを売る勢力は、少ない方が良いと思いませんか？」

ヤマトがクルシユに言葉を投げた。

「それはそうですが…」

「まさか…」

フェリスが声を上げた。どうしたんだ？

「スバルきゅん…君のいる騎士団って…」

あつ！そうなるよね…

「フェリス様、正解です♪」

って、ヤマト…

「えっ？スバル…」

エミリアが僕を見つめている。ここまでかな？そんなエミリアの隣に転移陣が現れ、一人の騎士が現れた。

「エミリア様、初めまして。幽玄龍騎士団の小隊長をしておりますファルコンと申しま

す。団長からの言伝です。無駄な殺生はしない。噂を信じないように、だそうです。では、これで失礼します」

ファルコンがフォローを入れて、転移していった。一番騎士らしいファルコンなら、信憑性は高く感じるだろう。

「見守ってくれているんだ…スバル、ありがとう」

何が、ありがとう？何がだ？

◇

夕食後、フェリスの計らいで、ヴィルヘルムさんと手合わせすることに…この人は強い。どうするかな？

「スバル様、この老兵に、本気を見せて下さい」

本気って…死んじゃうよ。ダメだって、クルシュを護って貰わないといけないんだから。

剣を抜き、斬り掛かってきて。僕は特に避けずに、攻撃を透過していく。

「なんですと…透過能力…」

フェリスが試すように魔法弾を撃ち込んできた。それらは吸収していく。

「スバルきゅん…何で？魔法が効かないの？」

様々な剣技を、僕に叩き込んでいたヴィルヘルムさんは、息が上がってきている。

「もう止めた方が良いでしょう」

「スバル様、本気は見せて貰えないのですか？」

「ヴァイルヘルム様には死んで欲しく無いのです。わかってください」

しかし、更に剣技を繰り出しているヴァイルヘルムさん。このままだと、マズい。しようが無い。見えないラインをヴァイルヘルムさんの身体の内部へ侵入させて、心臓を一時的に止めて、再起動させた。

その場で倒れるヴァイルヘルムさん。次はフェリスだな。瞬動術で懐に入り込み、首の頸動脈の血流を一瞬止めた。その場で失禁しながら崩れ落ちるように、意識を飛ばした彼。

「これでいいか？クルシユよ！これ以上は、殺しかねないから。相手を殺さずに戦うつて、つらいんだよ」

「スバル…あなたは…」

言葉を飲み込んだクルシユ。エミリアは固まっている。

「じゃ、僕は寝るよ♪」

一人になりたくなった僕は、自分の部屋へ戻った。

## SS：寝込みを襲う黒き女

部屋で寝ていると、性懲りも無く、あの黒い女がやって来た。

「スバルの魂を返して…」

何故か女は、僕がスバルの魂を、持っていることを知っている。魂に臭いは無いのに、何を目印にしているのだ？

「ダメだ。お前は、スバルを死に戻りとして、生き返らせるんだろ？」

ビンゴだったのか、怯む女。

「なんで、こんなことをする」

話している間に、女の本体の居場所を探る。思念波である女。通常、思念による有線でのコントロールのほずである。

「彼に、会いに来て欲しいから…私を彼の手で解放して欲しいから…だから、彼には英雄になつて欲しいの」

どこかに囚われているか、たぶん、封印されているんだろな。

「ダメだな。封印されるほどの悪さをしたのであれば、渡せない」

「そう…ならば、死ね！」

僕に襲い掛かってきた女。だけど…ダメージは入らない。闇属性攻撃は、大抵の者は死に至るダメージを負うけど、闇属性の者には空気と一緒に、心地良い風程度の感触にしかないらしい。

「どうして…どうして、死なないの？」

彼女の闇が僕に触れ、彼女の本体を見つけた。封印の祠みたいな場所にいるようだ。

「見つけたよ。お前の本体の居場所をな♪」

怯む女。その女を抱えて、本体の元へと転移した。僕が転移したことで、女は恐怖の表情を顔に浮かべている。

「どうして、ここに来られるの？瘴気が充満しているのに…」

「特殊体質だからね」

僕はオーラ体であり、生物的な肉体は無い。なので、毒も効果は無い。

「私をどうするの？」

「お前の良心な部分だけ切り離して、生きてみるか？」

「出来るの？」

「わからない。やってみないとね」

目の前の女の成分を分析していく。肉体、精神…うん？二重人格か？人格が二つあ

る。そして魔女因子…これが、悪の権化かな？

精神を、それぞれの人格とリンクされている部分で切り分け、魔女因子を『強奪』し封印して、悪そうな人格に返却した。そして、良さそうな人格と精神だけを取りだし、エミリアの身体をコピーした器を作り、取り出した人格と精神を取めた。そして、彼女の魂の代わりにコピーしたスバルの魂を入れて、器、精神、人格に対して安定させた。

「どうだ？これなら、死に戻りなんか、できないだろう？」

スバルの魂を死なせることは、サテラの死に繋がる。彼女の魂は、スバルのコピーした魂であり、それが死ぬと言うことが、サテラも死に、二度とスバルとは一緒になれないってことだ。次の死に戻りの際、サテラは消える運命である。そもそも死に戻りすら起きない。戻る先は無いから…この方法は、彼女にとつて残酷な方法ではあるが、彼女の意志による死に戻り行為は阻止できるだろう。

「かまわない。だって、スバルと一緒にいられる。ずっと…生きている限り…」

執行猶予無しの刑を執行されても、笑顔のサテラ。これで、終わりかな？つて、全然、僕は呼び戻されれない。うくん…エミリアの王選まで、ダメなのか？それとも、あのオカッパを倒さないとダメなのか？

もう一人…嫉妬の魔女サテラの方は、このまま封印されていてもらうか。魔女教の信仰対象だし。とは言うものの、魔女因子は封印してあるので、その効力は無いけど。

幸せそうな魔女サテラと二人で、封印の祠から転移した。もう黒い女は出ないはずである。魔女因子は機能しないし。今夜から、ゆっくりと寝られそうだな。

◇

朝、目覚めると、右にクルシユ、左にエミリア、僕の顔を睨むように覗き込んでいるエミリアがいた。あれ？なんで、エミリアが二人？

「ねえ、スバル！説明してくれる？なんで、私がもう一人いるの？」

はて？錆付いた脳細胞をフル回転させていく。昨晚、なんか、やらかしたか？ああ、サテラか…魂を見ると、スバルからコピーした魂を、サテラの精神が嬉しそうに抱き締めていた。

「ああ、この子は、サテラって言うんだよ。エミリアでは無い」

驚いた顔のエミリア。

「サテラって…あの？」

「どの？」

「世界の半分を滅ぼしたという…」

「知らないよ。本人に訊いてね♪」

「で、スバル…あのねえ…」

恥ずかしそうな顔をするエミリア。

「クルシユ様はわかるんだけど…なんで、その子と…」

交われているのか…かな？

「エミリアはまだ出来る年齢では無いが、彼女は出来る年齢だからだ♪」

いや。器を作るときに、僕とだけ出来るように作ったから、つて言えない。

「そうなんだ…羨ましい…」

真っ赤な顔で俯くエミリア…かわいい…やはり、娘梓だな♪



## フェルトの興味

——ナツキ・ヤマト——

フェルトについて、僕なりに調べてみた。彼女は、今は亡き王族の生き残りらしい。なので、王選の候補者になって貰った。

「王になれば、したいことが出来るんですよ？」

「いや、フェルトは王になったら、エミリア様に執行代行して貰うんだ」

「え？なんで？」

目を点のようにしているフェルト。まあ、そうなるよな。

「いいか？フェルトのような実力者は、2番目がいいんだよ。1番目になると独裁者のように見えちゃうから」

「おおう、なるほど…」

納得してくれたフェルト。彼女は理解が早くて良い。

「フェルトは王より、宰相とか、大臣とかの方が良いと思うんだ。ただ、王選に出て貰うのは、エミリア様が銀髪のハーフェルフであり、選ばれる可能性が低いからだよ」

「ヤマト様は先を見ておられるのですね。別々に王選で戦い、裏では……うくん、良い策略です」

「実は、クルシユ様も同じだ。もし、王になられた場合、エミリア様に執務代行をする決意をされている」

「そうになると、残りの候補に勝てば良いのですね」

「フェルトは人海戦術に長けていると思うんだよ。一人で何でもこなしちゃダメだよ。上から指示を与えるだけがいい。時にはエミリア様に、アドバイスを送れると最高だよ」

「表に立たず、一歩引いてですね。奥が深いです」

うんうんと頷いているフェルト。素直で良い子だ。

「で、農らの領土はどうされます?」

ロム爺が訊いてきた。

「取り敢えず、ここ王都の労働環境を整えよう。それでいいかな、フェルト?」

「ヤマト様についていきます」

「それが一段落したら、エミリア様の侍従と侍女として、仕えるんだよ」

「それは、どういう理由ですか?」

不思議そうな顔でフェルトが訊いてきた。

「フェルトは貴族社会がわからないだろ？ エミリア様から習うんだよ。後、僕の兄さんがエミリア様の騎士をしているから。兄さんに、エミリア様共々、帝王学を習うんだ」  
「そうか…勉強は必要ですね。貴族社会を知らない、それすら壊せないのか」  
「そういうことだ。どこが弱点かを知る事が大事だ。あと、全てが悪い訳は無いから、良い部分は取り入れるんだよ」

「はい♪」

彼女の笑顔は好きだ。もう、死にそうな顔の彼女は見たく無い。

「領土に関してはエミリア様から少し貰い、徐々に大きくしていく。始めから大きいと、失敗し易いから」

「確かに広い領土だと、見回せないですな」

「うん、狭くても良い領地にするよ」

「そこで、どう運営すれば良いかを学ぶんだよ」

フェルトの頭を撫でながら、諭すように伝えた。

◇

王都にいるフェルトの仲間達への仕事の斡旋が終わり、二人をエミリア様の元へ連れていった。

「王選の候補者を？」

エミリア様が難色を示す。

「エミリア様、侍従、侍女にして貰うのは、彼らの勉強の為です。ですので、お願いします」

僕はエミリア様へ頭を下げた。それを見たフェルトとロム爺も、頭を下げた。

「エミリア、受け入れてあげなよ。エミリアの為にもなる」

兄さんが後押ししてくれた。

「私の？」

「エミリアの傍で、エミリアを見てもらい、エミリアのダメな部分を指摘して貰え。いいか、弱い者は助け合った上で、競い合つてこそ、強くなれるんだ。一人でうじうじ抱え込むな。銀髪のハーフェルフの前に、お前は王選の候補者だ。フェルトの良い部分を見つつけ褒めて上げる、フェルトのダメな部分を見つけて、注意してあげる。そして、それと同じ事をフェルトにして貰うんだよ。お互いに、相手を思いやるのが大切だよ。相手を蹴落とすタイプの候補者は、王になっても碌な者にならないと思う」

「さすが、兄さん、経験者談ですね」

「だから、お前の兄では、無いつて言っているだろう？それは、お前の勘違いだよ」

「ちよつと待つて下さい。経験者談つて？」

あつ、僕が失言をしたようだ。

「ヤマトのおおおお！まったく、余計な事ばかりを…」

兄さんが困った顔をしている。マズいなあ。案件を放り出されると困る。

「ねえ、スバル…どこかで王様していたことあるの？」

エミリア様に訊かれた。

「まあ、ちよつとねえ…」

誤魔化そうとしている兄さん。兄さんはジョブ特性として、嘘の吐けないスキル持ちである。誤魔化すか、はったりを言うことしか逃げ道は無い。

「どんな国ですか？」

フェルトが喰い付いた。サテラも興味あるのか、兄さんをじつと見つめている。

「どんな国って…厳格なルールを持つ国だよ。僕がルール違反すると出入り禁止にするくらいに厳格さだよ」

「スゴい。王様を出入り禁止にするルールって…」

フェルトが興味を持ってしまった。僕を睨む兄さん。うんうん、今回は潔く非を認めよう。

「スバル…あなたは何者なの？」

「僕はエミリア様の騎士です」

「それ以前は、何をしていたの？私は、スバルのことが、もっと知りたいのよ」

エミリア様の耳が朱い。兄さんには惚れない方がいいんだけど。

「私も知りたいです。王様以外に何をされていたんですか？」

フェルトもかな…こっちは興味本位ほいけど。サテラはじつと兄さんを見つめてい  
る。

「う〜ん…」

言えないよな…噂の鬼畜本人ですって…

「ねえ、スバル…あなたが騎士団の団長さんなんじゃ…」

エミリア様が正解に辿り着いてしまった。兄さんはどう交わすのか？

「そう…僕が…噂の鬼畜本人です…」

嘘が吐けないスキル持ち。とても、不便である。

「そうなんだ♪」

って、嬉しそうなエミリア様。

「鬼畜って…まさか、あの噂レベルの騎士団の団長？」

それに対して顔色が悪くなるフェルトとロム爺。まあ、極悪非道な噂が多いから  
なあ。いや、ほぼ事実ではあるが。

「だから…エミリア…」

とても困った表情の兄さん。

「うん？これからも、お願いします」

ch u

固まる兄さん。エミリア様が兄さんの頬に口付けをした。兄さんがエミリア様を苦手とする理由がわかった気がする。真つ赤な顔で兄さんに笑顔を向けているエミリア様。

「なんで？キス？」

「これまでのお礼です。何度も危ない所を助けてもらつたし。私には手を出さない節度もあるし……適齢期になったら、サテラみたいにしてくださいね」

ああ、完全に心が持つて行かれましたね。だけど、兄さんは嬉しそうでは無い。苦手なんでもんな。今までに、エルフによる女難を、幾多も出くわしている兄さん。

「なるほど、勉強になるなあ」

つて、フェルト。そこはマネしない方が良いと思う。

——フェルト——

エミリア様に、村を1つ任された。村人達から要望を訊いていく。出来そうな物と、出来なさそうな物に分けてメモしていく。文字はラムさんに習っている。女の子らしさはラムさんに習っている。学ぶことが多くて、楽しい毎日である。

「どうだった？」

ヤマト様に訊かれた。

「牧場の柵を直すのは、出来そうだな」

「言っただろ？フェルトが動いちやダメだよ。誰かにやらせるんだ。必要な人材と予算を書き出して。ロム爺は、その人材に見合う者を王都にいる仲間から選び、僕は予算を精査して、お金を工面する」

「ああ、そうだ。自分で手を出したら、独裁者に見えちゃうのか。私つて独裁者タイプかな？」

「いいか、フェルト。独裁者は国民全員を下僕として扱える者だ。だけど、フェルトにはなれない。なれない者が独裁者のような行動をすれば、目の上のたんこぶで、暗殺される可能性が高い。だから、ダメだつて言っているんだよ。わかるか？」

ヤマト様は私を心配してくれているようだ。そうか、私が死んだらマズいのか。エミリア様も道連れになるかもしれない。ただでさえ、忌み嫌われる銀髪のハーフェルフだし。

「そういうことだ。助け合つて、強くなつて欲しいんだよ」

あれ？心が読めるのかな？

「ああ、僕と兄さんの前で、嘘は吐けない。注意しろよ。兄さんは僕ほど優しくは無い」



今まで、嘘を吐いたことが多少あった。バレていたのか…見逃してくれたのか…  
「後、剣術なども習っておいてくれ。兄さんに頼めば教えてくれるよ」

鬼畜なんだろう？

「大丈夫だよ。小さい子には優しいから」

なるほど…

「そうだな…ナイフなんかどうだ？」

スバル様に剣術を習いたいと伝えると、武器を用意してくれた。

「まず、ナイフの持ち方から」

使い方によって握りが違うのか。いつも咄嗟に握っていたけど。

「質問です。短剣で長剣に勝てるんですか？」

「愚問だ。負ける訳ないだろ？まあ、技術と鍛錬は欠かせないが」

木で出来た剣を渡された。スバル様は木で出来た短剣を2本持っている。

「それで僕と戦え！」

あんなに短い剣。負ける気がしない。こちらの1/5くらいしかないし。だけど、甘かった。撃ち込んだ剣を短剣で受けとめ、簡単に懐に入られて、胸を揉まれた。うっ！  
「わかったか？目を鍛えろ。相手の剣を受け止められる腕力をつけろ。いいな」

「は……」

鬼畜……何となく理由が……考えていたのとは違う。ロム爺達が見ているのに、身体中をアレコレされる。こういうのって、公開陵辱って言わないか？

スバル様が鬼畜と呼ばれる理由が、分かってきた。手合わせの時、撃ち込まない代わりに、身体のアチラコチラを触られている。胸を揉まれ、お尻を撫で回され、乳首をピンポイントで摘まむし……うくん、最近では触られることが嬉しく感じたり。スキンシップされているようで、嬉しいのだ。

女子供を弄びつて、こういうことなのか。単なるスキンシップ好きって感じに思える。まあ、噂だし、尾ひれがつているのだろう。

「大変です！魔物が出ました！」

私の任された村の民達が知らせに来た。

「フェルト行くぞ！」

「はい！」

「農も行きます」

スバル様と私、ロム爺で現場へと急いだ。村に侵入している魔物達。

「フェルト、殲滅するぞ！」

って、スバル様は、直ぐに魔物を屠っていく。ナイフでだ。

「団長！私達も戦います」

騎士団の方々が次々に来た。なんだ、この威圧感。王城で見かけた騎士とは違う。殺気をひしひしを感じる。魔物と交差した瞬間に、魔物が倒れていく。剣捌きがまるで見えない。

「兄さんに、目を鍛えろって、言われただろ？」

ヤマト様が隣に来てくれた。

「相手の剣捌きが見えないと、勝て無いぞ」

ヤマト様の手には、聖剣が握られている。まさか、勇者なのか？

「僕？勇者じゃないよ。まあ、それなりの能力が無いと扱えない剣だけどね」

って、私達に向かってくる魔物を一刀両断していく。

ドン！

誰かが魔法を放ったようだ。魔物達が大量に倒れていく。これが噂の騎士団の戦いなのか？普通は怯むのに、逆に魔物達の方が怯んでいるように見える。

「埒明かないなあ。めっちゃん、発生源を特定して、消せ！」

スバル様の指示で、宙に浮く女性。手には魔導書を持っている。彼女の呪文により、森の奥深くで火柱が上がった。

「あんな奥にか。ファルコン、アイリス、フレイ、行け！殲滅だ」

「了解！」

「残りの者達は、村にこれ以上入れるな！」

スバル様の表情がいつもと違う。引き締まった戦士の顔になっていた。

魔物との戦いが終わり、怪我人を治癒する騎士団のヒーラー達。ヤマト様は壊れた家を直している。それも魔法でだ。

「フェルト、これが本当の戦いだ。お前は弱い。だから、指示を出す者になるんだ。いいな」

と、スバル様。

「はい」

「指示を出す者も、剣術の鍛錬は必要だ。どこをどうするかは指示を、的確に出さないといけないからな」

「はい」

何も出来無かった。足が竦んで、前に出られなかった。あの時のシーンが、脳裏に浮かんで……ロム爺の腕が、あの女に斬り落とされたシーンだ。

「フェルトは死に直面したのか」

記憶を読まれたのか？

「そうだ。記憶も読める」

そうなんだ…

「いいか、フェルトは一人では無いんだ。怖がるな。ヤマトを頼れ。アイツはお前の騎士だからな」

ヤマト様が私の騎士…

「そうだ。ヤマト様は勇者なんですか？」

「どうして、そう思う？」

「聖剣を持っていきますよね？」

私の目利きによれば、あれは聖剣エクスカリバーのはず。威圧感と神々しさを感じたし。

「ああ、あれか。ヤマトは勇者って言うより、ラスボスに近いんじゃないかな？」

うん？逆の立場？ラスボスが聖剣持ちちゃダメでしょ？

「大丈夫。僕が魔剣を持っているから」

って、禍々しい剣を手にしたスバル様。それは？見た事が無い。

「これか？魔剣ダークエクスカリバーだよ。聖剣エクスカリバーをコピーして、聖属性を魔属性と闇属性に変えた物だ」

魔剣？エクスカリバーの闇バージョン？コピーして属性変更…錬金術か…

「そんな感じだ。アイツをラスボスにさせない。ラスボスには僕がなるよ」

笑うしかない。弟をラスボスにさせない為に、自分がラスボスになることを、夢見ている兄。ねじ曲がった兄弟愛か？鬼畜的な発想なのか？

「だから、フェルトは気を大きく持て。ラス前のボスが後盾なんだからな！」

なんか、心強い。だけど、ラスボスとラス前のボスが後盾つて、言えない気がする。

「そうだな。公言は出来ないか。じゃ、噂の騎士団の副団長が後盾と言え」

あの騎士団の副団長なんだ…ヤマト様は…そうなると団長は…目の前のスバル様を見上げた。

「僕は…うくん、エミリア様の騎士だ！」

つて、ことにしてあげよう。上に立つことが嫌いなのかな？普通は自慢する所だろ思うのだが。うくん、スバル様への興味が尽きない。

ただ一つ、確信に近い想いが芽生えてきていた。スバル様が王様になってくれないかな。そうなれば、きっと良い国になりそうな気がするんだけど。

## 報復

クルシユの下で一晩を過ごして、エミリアの元戻ると、屋敷は騒然としていた。

「ああ、バルス…レムが…レムが…」

ラムが泣きじやくっていた。レムがどうしてのだ？ラムが僕の手を引いて、レムの部屋へ連れて行った。レムは彼女のベッドの上で横たわっている。彼女の魂がラムを見て近寄って来た。つまりはそういうことか…

「ヤマト、屋敷を結界で覆わせろ！」

「了解です」

レムの部屋には、エミリア、フェルトもいる。レムの手を握り、涙していた。二人をどかし、レムを全裸にして、レムの身体を精査していく。おや？左手の親指の付け根に異物がインプラントされている。これかな？『強奪』で取り出してみた。何かの針のような物である。

「ベア子…これを解析しろ！」

「緊急事態ねえ、手伝って上げてもいいわよ」

ベア子も涙していた。レムは誰にでも優しいかったから。ベアトリスが素っ気ない

態度をとつても、笑み絶やさず接してくれていた。

次に、レムの身体の傷を修復して、全身を浄化、そして、ラムの周囲を飛び廻っているレムの魂を捕獲して、レムの器に魂を入魂し、心臓を再起動させた。しばらくすると、ゆつくりと、乳房が上下しだした。

「バルス…ありがとう…」

僕に礼をいい、まだ意識が戻らないレムに縋り付き、優しく抱き締めたラム。

「ラム！レムは2，3日安静だぞ」

「うん♪レムの代わりに家事をがんばるよ」

部屋を出ようと振り返ると、エミリアとフェルトが僕を見て固まっていた。

「どうしたんだ？」

僕の声で我に返った二人。

「今の蘇生術ですよね？」

怖い物でも見た顔になっているエミリア。

「すげえ〜！」

一方とフェルトは、瞳が輝いているようだ。

「蘇生コンポと名付けた禁術系だけど…」

「禁断の魔術…」



「そうだよ。大昔、それを行使して、僕は人間を辞めた。そして、その後、更に極めて、僕は生物を辞めたんだよ」

そう言い残し、部屋を後にした。部屋の外にはヤマト、ファルコン、ベアトリス、そしてサテラがいた。

「ベア子、アレはなんだった？」

「呪い系の魔具、『夜明けの眠り』……」

寝ている間に永遠の眠りにする奴だっけ。

「ファルコン、反撃をする。非戦闘員の仲間に、手を出した勢力を叩く」

「親衛隊を入口に集合させます」

ファルコンが外へと向かった。

「ヤマト、屋敷の護りを固めろ！」

「了解です」

ヤマトは転移していった。

「サテラは、エミリア達のガードだ」

「うん……レムちゃんはいいい子だったのに……許せない」

ベア子同様、レムが笑顔で接していたサテラ。なのでスバルの次に、お気に入りらしい。

『フィン、セバス・チャンとソリュシヤン、ユリ…後…なんだっけ…ああ、ベータを派遣してくれ』

城にいる副官の者に、念話で指示を出した。あれ？ベータの名前が思い出せない。まあ、いいか。本人が来たら、訊いてみるか。

◇

レムの記憶を読み取った。昨日は、フェルトと共に、村へ行き、子供達の要望を訊いて回っていたようだ。その時、誰かのペットの兎に噛まれたようだ。誰かって誰？村の子供では無いのか？どこから来た子供だ？

援軍が転移してきたので、エミリア達に紹介をする。

「屋敷の護りを固めようと思う。そこで、僕の従者を数名、常駐させる。まず、セバス・チャン、彼には執事をしてもらう」

「エミリア様、フェルト様、よろしくお願いします」

礼儀正しい振る舞いの出来る戦闘執事である。

「ユリとソリュシヤン、メイドをしてもらう」

セバス・チャン同様礼儀正しい振る舞いの出来る戦闘メイドの二人を紹介した。

「で、ベータは村の守護をさせる」

「主様！いい加減名前を覚えて下さい。私はルプスレギナです。何度も奉仕してい

るでないですかあゝ」

ぶんむくれるルプスレギナ。だって、覚えにくいんだもの。コイツは見た目が優しく見え、行動はお茶目で、ジヨブがクレリックで治療術が使えるので子供達の受けが良い。ただ、その内面は残酷な殺戮者であり、二つ名は『笑顔仮面のサディスト』だったかな。そして、礼儀作法と言う文字が辞書に無い、自由奔放な振る舞いの戦闘メイドである。

「お前、命令違反したら、あの骸骨野郎の所に返品するからな！」

こいつ、たまに命令違反をして、戦況を混乱させて愉しむことがあるらしい。

「ダメつす。返品禁止つすよ。あいつ、肉棒が無いじゃなつすか」

非常に困ったような表情のルプスレギナ。性欲という物を芽生えさせて、アインズというリッチから奪い取った戦力である。リッチ故、肉体が朽ちており、女を満足させることが出来ないのが、彼女を引き留められなかった理由である。

「スゴい…美人さんばかりですね」

つて、エミリアが固まっている。フェルトはルプスレギナに懐き始めているようで、甘えるようにつきまとい、ルプスレギナを困らせているよう。まあ、いいか。

「ファルコン、ヤマトよ。2チームを村に展開させて、潜んでいる奴を見つけて。子供に成りすましている。魂で判別しろ」

「御意」

「了解です」

二人が出て行つた。

「スバル：どうするの？」

心配そうに僕を見ているエミリア。

「仲間を傷つけた勢力は殲滅させる。アイツらは僕を怒らせた。その場合、どうなるかを教え込んでくる」

「無茶とか無理はダメだよ。帰ってきてよ。ねえ、スバル」

「当たり前だろ？ルプスレギナで愉しみたいし」

「もう！スバルったら…」

少しエミリアの表情が緩んだ。

「パツク、エミリアを頼むぞ」

「おお、任せておけ！」

モフモフ精霊が顔を出した。さて、行くか…

◇

村に付くと、ヤマトが特定し、闇の牢獄へ落としたようだった。

「で、ですね…ははは…」

ヤマトは何かをやらかしたようだ。

「今日は何をやらかしたのかな？」

「落ちる最中に、何かを召喚したようで……」

「村の外から、魔物のオーラが多数……」

「ファルコン、村の外へ展開して。めっちゃんは村の上空で待機！」

「了解！」

「ヤマトは村の周囲に結界を張って、ルプスレギナは、村民を村の中心に集めて、子供達を護れ！」

「了解」

「おまかせっす」

『っす』言葉のルプスレギナ。『にや』言葉では無いので、スルーだな。うん？地中をを何かが這って、近づいて来た。モグラ？いや。地龍系か？龍喰剣を手にして、地面に突き刺し、サマエルの毒というドラゴン系、蛇系、神格系に有効な猛毒を流し込んでいく。

「主様、それ、危険っすね」

「人間には効果無いよ。この毒は……ああ、クレリックには効果あるから、近寄るなよ」

「はいっす」

忘れていた。こいつ、クレリックだった……まあ、効果範囲は地中だから、問題は無いかな。暫くすると地中を這うような波動は消えた。退治出来たかな。

「めっちゃん！高みの見物している奴を見つけてくれ！」

「了解！」

「見つけたら、座標をドララン君へ報告、ドララン君は主砲を撃ち込め！」

ドララン君って言うのは、僕の亜空間転移ができるお城の名前である。正式名称はキャツスルドラン。大昔、ヴァンパイアの王が生きている巨大ワイバーンの身体をベースに、城に改築したらしいので、意志を持ち、自己判断での行動も出来る、お城である。めっちゃんは、空に浮かんでいる分厚い魔導書を手にした魔導師である。彼女の見た目はふくよかである。着太りもしてない。見た通りの身体だ。

ズツト〜ン！

主砲が火を噴き、遠くでキノコ雲がモリモリと立ち昇っていく。あの辺りにいるのか。

「ちよつと、挨拶してくるね♪」

◇

目の前に白い布だけを巻き付けた女性がいる。髪の毛は白金である。ぱつと見た目は女神系であるけど…

「貴様…何者だ？」

質問はスルーして、迷わず白い布を『強奪』した。うん…美味しそうな裸体だな。

「辱めを…貴様…」

次の瞬間、また白い巻き付けた姿になり、僕の手に入れた白い布は大蛇になっていた。しかし、僕に噛みつくくと即死した。

「何…瞬殺だと…」

「蛇系を即死する毒を、全身に持っているからね」

正確に言うとは体表面をサマエルの毒でコーティングしただけだ。

「お前が、『虚飾の魔女』 パンドラか？」

「どうして…それを…」

狼狽える魔女。記憶を読んだとは教えない。

「貴様は何者だ？」

「エミリア様の騎士だよ」

「うぐっ！」

こっ所り『催淫』を発動してみた。これは効果有りそうだな。記憶によると、世界を置き換える能力があるらしい。『見聞違い』という『身代わりの術』系のような。なので、見えない部分を責めてみたのだ。

「貴様…鬼畜か…」

身体に巻き付いている白い布が、彼女の体液で透き通っていく。なんかエロい♪

「そっだよ。僕、鬼の子だから」

「まさか…伝説の騎士団の?」

「それは、知らないなあ。で、目的は何かな?」

地面に四つん這いになっているパンドラ。立っていることが出来ないくらい、悶悶としているようで、片手で自分の胸を揉んでいる。では、念動力で体内を蠢きさせる。

「うぐつ!止める…止めてくれ…」

腹這いになって地面に横たわり、もう片手は下腹部に伸びているようだ。

「次、おいたいしたら、わかっているな?」

あれ?果てて居る。耐久度が無いようだ。証拠を写真に収めて、次回の強請の材料にするかな。そっだ、能力も『強奪』しておくか。

◇

村に戻ると、魔物退治は終わっていた。

「団長、そちらはどうでしたか?」

ヤマトに証拠写真を見せた。

「鬼畜ですな…殺さずに、辱めた姿を写真に収めるとは…」

むやみに殺すと、何かのフラグが立ちそうであるので、魔女は無力化して、殺さない方向である。まあ、二度目は殺すかもだけだ。



## 呼び出し

朝、目覚めると、両手両足が動かなかった。目の前には、怒ったエミリアの顔が、僕を見つめていた。

「おはよう、エミリア……」

誰かが腕枕で寝ている予感……エミリアがいるってことは、クルシュとフェリスでは無  
いってことだよな……あれ？後、誰がいたっけ？

頬に当たる誰かの頭が2つ……首が横に向けない。横目で見ると、ピンクの髪の毛と、  
水色の髪の毛が見えた。なんで、この姉妹がここにいるんだ？太股には柔らかな物を感じ  
る。うくん、全裸か？

「ねえ、どういうことかな？なんで、レムとラムが全裸で添い寝？」

僕の予想通りであるが、何故、こうなつたんだ？

「どうしてだろうね？」

「うくん……わかったわ！今夜は私が添い寝をします。全裸で……逃げるなよ！スバル！」

ご立腹なエミリア。まあ、どうだろうな。って、エミリアが起きているのに、この姉  
妹は寝息を立てて安眠中である。二人を起こさないよう、ベッドから抜け出した。そし

て、『着衣』を発動して服を着た。

部屋を出ると、セバス・チャンが待っていた。

「主様、おはようございます。お食事の準備は出来ております」

「ああ、おはよう」

なるほど…：メイドが増えた事で、あの姉妹は寢坊をしても、問題が無いことに気づいたようだ。

「エミリア…」

僕を睨んでいるエミリア。うくん、不可抗力だと思います。爆睡タイプの僕は、夜這いをされても気づかないんだもの…

エミリアを背中から抱き締めた。

「そんなんで、許してあげないよ。私にも優しく接してよね」

優しく接しているつもりですが…：今夜が恐ろしい…：逃げるとマズいかな？

食後、姉妹が起きてきた。

「エミリア様、申し訳ありません」

二人揃って、エミリアに頭を下げる。

「大丈夫よ。レムはもういいの？」

「はい。スバル様のお陰で、身体が軽いです」

「それは良かったわ。スバル、忘れないでよ！」

姉妹には優しい声で接するエミリア。僕には怒った声である。理不尽な扱いだ。どうして？

『ねえ、リタイヤしていい？』

ヤマトへ念話で訊いてみた。

『ダメですよ。そろそろ女心を勉強してくださいね、兄さん♪』

って、返答が…男の僕には女心は理解出来ない上、ヤマトの兄では無い。理不尽である…

◇

しかし、エミリアの思い通りには行かなかった。王城から、招集が掛かったのだ。近況を報告しろってことのようなのだ。参勤交代みたいなもので、拒否権は王選候補者には一切ない。拒否すれば、脱走決定であるのだった。

僕とエミリア、ヤマトとフェルト、付き人として、レムとセバス、遊軍としてルプスレギナを連れ、定宿にしているクルシユの屋敷に転移した。

「クルシユ、悪いなあ。また、厄介になるよ」

「問題は無い。いつでも、来てくれていいのだぞ、スバル」

皆の目があるので、男装の麗人モードのクルシユ。

「エミリアとフェルトは、ここで礼儀作法を学ばして貰え」

頷く二人。

クルシユは何かを訴えるような目で僕を見ている。うくん：限界なのか？ヴィルヘルムが苦笑いしているし。

「クルシユ：お前の部屋で少し話そうか？」

「望むところだ！」

男装の麗人の表情がおかしい。もう、限界のようだ。急いで、クルシユの部屋へ向かった。

「逢いたかったです」

二人きりになると、僕に抱きついてきたクルシユ。軍服を脱ぎ去り、下着姿になっている。

「一昨日会ったばかりだろ？」

「ですが…」

涙目で僕を見つめている。なんで、僕なんかに惚れたんだ？はて？

そのまま、ベッドへ向かう僕達。

◇

翌日、フェリスと二人で情報を収集しに出掛けた。

「スバルきゅんとデートみたいだね」

僕の腕に抱きついて甘える男の娘。全裸にしなければ、問題は無いかわいい娘である。

「変わったことはあったか？」

「ないよ。ああ、クルシユ様が3日に一度じゃ、ダメかもって感じだよ。どうする、スバルきゅん」

それは重症である。特に媚薬なんか使った覚えは無い。はて？何故だ？

そんな僕達の前に、フルフェイスの兜を被った男が現れた。

「スバル・ナツキだな。一緒に来て貰うぞ」

って、一方的な言い方だ。既に周囲を囲まれたみたいだし。

「お前、誰だ？」

「プリシラ様にお仕えするアルデバランだ。ちよつと、顔を貸せ！」

「おい！お前ら、失礼だろ?!なんで、こんなにもどかな雰囲気壊すんだ?!」

ご立腹なフェリス。

「フェリスか…なんで、お前がコイツと…」

「スバルきゅんに、ちよつかいを出すのか？プリシラ様は？」

ああ、プリシラって、僕の好みでは無いんだが…

「わかった。フェリス、お前は帰れ！ちよつと、行つて来るよ」

「だけど、僕の腕を更に強く抱き締めるフェリス。」

「一人で行かせられない。ダメだよ。ねえ…」

「お前には見せたく無いことをしてくる」

彼女？いや彼の耳元で囁いた。

「余計ダメだよ。お願い…行つちやダメだよ」

僕の本質に気づいているのかもしれない。だから、余計連れて行けないんだよ。フェリスを残して、プリシラの眷属達と共に、プリシラの屋敷へと転移した。

◇

豊満な身体に、橙色の髪の水が、ソファで寛いでいた。

「お前がプリシラか？」

「スバル・ナツキ、待っていたわ。君には興味があるのよ。ねえ、私の陣営に来ない？」

「何か、メリットでもあるのか？」

「そうねえ、王になつたら、あなたの好きにしていいわよ。この国をね」

「ふつ、断る。お前は、僕の好みでは無い」

「はあ？あなたの好みは関係無いのよ。世の中は、私の興味しだい、どうにでもなるんだからね」

「そうか……じゃ、手土産だ受け取れ！」

彼女の前に、頂上に兜が載っている挽き肉の山を発現させた。

「新鮮な挽き肉だ。それでも食べて、リタイヤしろ！」

「どういう意味？」

挽き肉の山から何かが落ちてきた。それを見て、固まるプリシラ。フルフェイスの兜が落ちてきたようだ。

「お前の従属は、もういない。ああ、お前の豪運は『強奪』させて貰ったよ。今後、僕達のジャマをしたら、次は君をどうしようかな。なあ、興味無いか？」

挽き肉の山の正体に気づいたプリシラが、嘔吐しだした。顔色も悪そうだ。

「まあ、精々、長生きしろよ。いや、長生き出来るといいな、プリシラよ！」

僕は、その場を後にした。そして、フェリスの元へ転移した。

◇

「ねえ、スバルきゅん！ やらかしていないよね？」

涙目で僕を見つめるフェリス。

「何をやらかすと言うのさ？ 僕は浮気はしないよ」

「きやつ！」

彼の涙を舐めると、かわいらしい反応をしていた。うくん、どうして、コイツは女で

は無いのだ？ 理不尽だろ？ ああ、プリシラとフェリスの性別を入れ替えるのも悪く無いかな？

「スバルきゅん、なんか、悪いことを考えたでしょ？」

フェリスが僕の顔を覗き込んでいた。

「いや、フェリスを女の子にしようか、どうか…悩んでいたのだが…」

「王選が終わるまで、男でいたいんだよ。わがままだけど…お願い…」

まあ、クルシユのナイトなものな。

「まあ、お前が望むなら、それでいいけど…」

二人でデートを楽しみ、屋敷へと帰宅。後、アナスタシアをどうにかせんとまあ。

◇

王城へ出向いた僕達。僕とエミリア、ヤマトとフェルト、クルシユとフェリス。王城へ着くなり、王選の候補者が4名になったことが告げられた。プリシラが脱落したそう  
だ。

5人の目が僕を注目していた。

「スバル…やらかしたの？」

心配そうなエミリア。

「師匠…何をしたんですか？」



師匠になつた覚えは無いぞ、フェルト。

「密会したのか？」

ちよつと不機嫌なクルシユ。

「やっちやつたんだね」

涙目のフェリス。

「兄さんらしい…素早いな」

関心しているヤマト。

なぜ、僕がやらかした前提なんだ？理不尽だろうが…

報告会が終わり、帰ろうとすると、呼び止められた。今度は誰だよ？

「スバル・ナツキ君、お手合わせを願いたい」

つて、爽やかそうな顔の男が声を掛けてきた。

「誰？」

「私はラインハルト・ヴァン・アストレアだ」

「誰の騎士だ？」

「今朝、プリシラ様に雇われた。君を倒す為にね」

ああ、反撃か？

「私闘は禁じられている。無用な戦いはしない」

「そももいかない」

剣を手にして構えている。

「ヤマト！ガードを頼む」

「了解！」

エミリア達のことをヤマトにまかせた。

「わかった。エミリアの騎士とでは無く、騎士団の団長として受けて立つ」

「騎士団の団長？」

あれ？知らないのか？ラインハルトが怪訝な表情をした。

「まあ、いいや。ここじや、ダメだろ。闘技場ですか？」

「いいや、王城で決める。広い場所だと私が不利らしいからな」

まあ、狭い場所は嫌いだよ。剣が使えないから…

「わかった。いつでも来い！」

「剣を構えろ！」

「あれ？僕は剣士では無い。魔法使いだ。剣は使わない」

「何？」

無詠唱、ノーアクションで『雷撃』を放った。剣を避雷針にして、カミナリが落ち、ラ

インハルトを感電させた。意識は狩り取られ、その場に崩れるようにして、倒れたラインハルト。

「次は、殺す。今回は警告だ。ジャマをするな」  
何事も無かったように、その場を立ち去る僕達。

——アナスタシア・ホーシン——

プリシラが放った刺客であるラインハルトが、一瞬で倒された。彼は近衛騎士団に所属する『剣聖』と呼ばれる程の『騎士の中の騎士』と言われる者である。それが、一瞬で倒されたのだった。エミリア陣営、フェルト陣営、クルシュ陣営は、何事も無かったように、この場を後にしたが、あの陣営は、あのスバルという人物の力量を知っていたつてことか。

「ユリウス、どう思う?」

自分の陣営の騎士に訊いた。彼はラインハルトには及ばないが、それなりに優秀な騎士である。

「自分の時は、拳一発でした。たぶん、剣も使えるオールマイティな騎士なのかもしれませんが。しかし、厄介なのは、無詠唱、ノーアクションで魔法が使えることです。精霊の加護を感じませんから、生粋の魔術師だと思います」

厄介な敵だ。戦うことになったら、不利である。いや、プリシラは戦って敗れたのかもしれない。眷属を全滅されて、ラインハルトを雇ったって考えるのが良いか。

「あやつの所属する騎士団は、わかるか？」

「調べてみます」

スバル・ナツキ：調べておく必要があるな。

——スバル・ナツキ——

予定外の行動で、疲れたので、クルシユとお昼寝…起きると、夕方だった。庭では、ヴィルヘルムがフェルトを鍛えてくれていた。エミリアは、クルシユの家人達から、貴族社会について学んでいた。

「悪いな。エミリアとフェルトの面倒まで見て貰って」

「いいんだよ。スバルきゅんは気にしないで。クルシユ様の面倒を見て貰っているから、ウィンウィンだよ」

って、フェリス。

「クルシユ…どうするかな。1日おきは、辛いなあ」

「スバルきゅんに対するクルシユ様の依存度が高くなっているんだよ。でも、1日おきは辛いよね」

同居するのが一番であるが：領土が離れているしなあ。

「1日おきにクルシユに来て貰うか：同居するかだな」

「同居？どこに？」

う〜ん：一番安全で、尚且つ俊敏に動ける場所：僕の城か：

「僕の城で暮らすか？」

「スバルきゆんの城？」

フェリスの目が白黒している。

「フェリスとクルシユに転移可能なアイテムを渡す。それを使えば、僕の城へは来られる」

「どこにあるの？」

僕は指を空へ向けた。

◇

夜寝るときだけ：1日おきに、クルシユとフェリスが来る事になった。彼女達の部屋を用意しておく。彼女達の部屋とリンクした部屋で、僕と一緒にない時は、移動制限がかかるけど、問題は無いだろう。僕に逢うのが目的だし。

内覧会では無いが、フェルト、エミリア、クルシユ、フェリスを連れて、お城へ帰還した。

「空の上か…雲が眼下に見える…」

驚いているフェリス。クルシユは、僕の腕に抱きつき、環境の変化には興味がないようだ。エミリア、フェルトは固まっていた。

「スバル…本当に王様だったんだ…」

「師匠…浮遊城の王様ってすげえ〜♪」

案内出来るのは、彼女達の部屋と僕の部屋、後、食堂程度か。僕の部屋に案内した。窓が無い部屋。三方を本棚で囲み、広めのベッドしかない。いや、机があるのだが、本や書類で埋まっていた。

「……」が僕の部屋だよ」

フェリスとエミリアは、本棚に喰い付いた。フェルトはベッドに興味を持ち…天蓋付きのベッドで、四方をカーテンで囲めるようになっていた。添い寝の相手が直ぐにバレないようにする配慮である。本棚には、色々な並行世界で集めた魔導書が並んでいる。

「スゴい…禁書庫にあるような書籍ばかりだよ」

って、エミリア。

「読めない文字の本ばかりだよ。スバルきゅんは読めるの？」

「え?!読めないと、置いていても、粗大ゴミだろ?書庫にある中で、読めそうな本しか持ち出していいよ」

「書庫があるの？」

エミリアが興味を持った。

「あるよ。ベア子が司書をしているから、エミリアの屋敷から見た本は、ベア子の部屋で見られるよ。基本、持ち出し禁止だからね」

様々な並行世界で手に入れている書籍類は、この世界にあつてはいけない物も多いから、持ち出しは禁止である。

「わかった。ベアトリスに頼んでみるわ」

「ベア子に訊いた方が、下手に探すより早いぞ」

ベア子と知り合いでは無いフェリスとクルシュにだけ、書庫を案内した。

「スゴい…無限回廊に本棚が無限にあるみたいだ」

無限な広さを持つ書庫。ここを管理するベア子、女神達と僕以外の者が入ると、ほぼ出られないと思う空間である。

「無い本が無いように、行く先々で補填をしているんだ」  
宇宙最大級の書庫だと思う。

## 忘れられた存在

事態は、突然動いた。

アナスタシア・ホーシンが、僕と商いをしたいと申し出たのだ。代理人として、ユリウスが来ている。

「君達の騎士団を雇いたい。報酬は、君の望む事。もし、アナスタシア様が王になられた場合、その権利をエミリア様に移譲する。これが、契約書だ」

本物の契約書である。この契約をすれば、エミリアは王になれる。問題は内容だな。

「仕事の内容は？」

「空飛ぶ鯨の退治だよ」

空飛ぶ鯨？どこかの世界にもいた魔物か？喰うと旨いという。

「それが出現しているのか？」

「ああ、商人のキャラバンが何度も襲われ、生き残った者はいない」

凶暴そうである。どうするか？

「その鯨はなんだ？」



まず正体を訊いておく。

「魔獣だと思う」

「生き残った者はいないのに、なんで言い切れるんだ？」

「過去に討伐隊を何度か送り込んでいる。そちらは生き残りがいるんだよ」

なるほど…

「いつ出るんだ？」

「出現の条件は分からない。出現場所はほぼ特定はされているが」

「なるほど…調査はしてみるよ」

契約書にサインをした。血を流さずに、エミリアの為になるなら良いことだし。鯨は出たところ勝負だな。

◇

エミリア達の目を盗み、鯨の調査に乗り出した。出現場所のリーファウス街道に向かうと、一面に霧が立ちこめていた。確かに魔物の気配を感じる。空気に同化して、様子を見ようとしたが、鯨の1匹が確実に僕に狙いを定めて、突進してきた。

『ダイヤモンドダスト』を発動して、ソイツをミンチにした。どうして、空気に同化した僕をターゲットトに出来るんだ？つて、ミンチにした鯨が再生していく。おいおい…聖剣で真つ二つにすると、2匹の鯨になった。うくん…分裂再生タイプかな？

倒した証拠は無くなるが、灰にするか。僕に掛かっているリミッターを外し、本来の力を纏う。その瞬間、空気は鳴動し、霧が霧散していく。そして、鯨2匹に対して、僕属性の『ダイヤモンドダスト』を叩き込んだ。光の微粒子が鯨たちの身体に突きささり、細胞を灰にしていくな。再生しそうな細胞は『強奪』して1箇所を集め、『地獄の業火』で燃やし、灰にしていく。これでどうだ？

鯨が灰化しきると、一面を覆っていた霧は、徐々に霧散していった。終わったか？リミッターセットして、僕本来のオーラのダダ漏れを防いでおく。だけど、意識的に漏らした僕本来のオーラのせいで、ここら一面には生物の息吹は消えた。有るのは灰だけの死の風景である。

今夜はここまでだな。エミリアのいる屋敷に帰った。

◇

「あなたは誰？」

エミリア達の記憶から、僕の記憶は消えていた。うくん、呪い系かな？

『なんか喰らいましたね？』

って、ヤマトから念話が届いた。僕の仲間達の記憶には僕はいるらしいが、この世界の者達の記憶からは消えたようだ。これが、鯨の能力か？

「あの霧は『名前と記憶』を食べるのよ」

って、サテラ。ああ、ここに専門家がいた。サテラの記憶からは消えていないようだ。「まあ、いけないことになったなら、それでもいいや」

「いいの？」

サテラの顔は寂しそうだ。

「ああ、いいよ。離脱時にはサテラだけ、お持ち帰りする」

「そう…」

ヤマトに契約書を渡し、アナスタシア・ホーシンとの契約の件を頼んだ。これで、僕は自由の身である。僕のやり方で、借りは返そうと思う。

——クルシユ・カルステン——

毎日が何か空しい。何かを忘れた気がする。とても大切なことを。

「どうしたんですか？」

フエリスに訊かれた。

「誰か大切な人を忘れた気がするのよ」

「大切な人？どんな人ですか？」

「私の心の支えだった。そんな気がするのよ」

「そんな奴がいたら、ボクが覚えているはずですが」

そうね。気のせいかな？

王選の方はエミリアが王で決まりであるが、形式的な王選が続いていた。フェルトは宰相、私は軍事担当、アナスタシアは商業担当の大臣職になる計画である。フェルトのナイトであるヤマト・ナツキの計画通りに進めていた。4人の候補者がそれぞれのしたいことを実現する為の布陣である。それについて、誰も文句は無かった。文句の付けようも無い計画であったのだ。

「疲れていて、現実と幻想の区別が出来ないのかもね」

って、フェリス。そうかもしれない。幻想の世界で、彼氏を作ったのかもしれない。疲れから逃れる為に。

——シユウ——

サテラと能力を奪ったパンドラと共に、魔女教狩りをしている。サテラが言うには、魔女で生きているのは、嫉妬の魔女とパンドラの二人で、それ以外は死んでいると言う。後、魔女でなくて、魔人っていうのがいた。でも、男には興味が無いので、即灰にして散らしたあげた。これで終わりか？

「あと、大罪の司教達もいるよ」

ってサテラ。ああ、脳ミソが揺れるオッサンのお友達か。脳ミソが揺れるオッサン

は、見つけ次第、サテラが爆殺してくれた。サテラ曰く『コイツは嫌い』だそうだ。  
「あいつはキモいよね」

って、パンドラ。同意である。あれは脳ミソが揺れすぎていた。

—— エミリア ——

何だろう？ スムーズに事が運び過ぎている。裏で誰かが暗躍している気がするが、私のナイトであるファルコンは、気のせいって言うし。なんだろう。何かを忘れてるんだけど……誰か、ヒントを……

ヒントを求めて、ベアトリスの部屋へ向かった。

「何かしら？」

私を敵意を込めた視線で睨むベアトリス。

「何か、気に障ることしたかな？」

「記憶に無いんでしょ？ 私の怒りはどこにぶつければいいのかしらねえ？」

記憶に無い。私は何かを忘れて、ベアトリスを怒らしてしまったようだ。

「ねえ、私は何を忘れたの？」

「大切な者……私にとって大切な者よ！ もう、出て行ってよ！」

部屋から叩き出された。私はベアトリスの大切な物を忘れたようだ。なんだろう？

「ねえ、パツク。なんだろう?」

「ボクにもわからないよ。ベアトリスとリンクしていた者かな?」

リンクしていた物?なんだろうな?

—— シュウ ——

あれからどれ位経つたのだろうか?ようやく、大罪の司教を全員灰にしてやった。

「これからどうするの?」

僕に身を預けるサテラとパンドラ。僕も疲れた。心が疲弊している。帰りたいたい…あの頃へ…

うん?警備隊がやって来たようだ。三人で気配を消して、やり過ぎす。警備隊にはフェリスがいた。元氣そうで凜々しいな。女性であれば…そんなことを考えたり。

「うん?何かいるぞ!」

ああ、ユリウスって妖精使いだっけ?気配を読まれたようだ。咄嗟に、その場から転移して逃げた。

まあ、気配を消しても、魔女が二人いるからな。妖精使いにはバレて仕舞うのかもしれない。

「どこへ行く?」

「城に帰るか…そこしか、帰る場所が無いし」

この世界の者達の記憶から消された存在である。この世界に、居場所なんか無い。

「あつ！いい場所があるよ。シユウのエナジー補給ができるかも」

つて、サテラ。スバル一途のサテラとは交わりたくない。かへ行つて、能力を奪つたパンドラでは抵抗力が無さ過ぎて出来ないし。僕のエネルギーは自然回復に頼つていた。

「じゃ、そこへ行こうか。エネルギーが保つかな？」

一抹の不安が過ぎる…

—— クルシユ ——

漸く、王選の日を迎えた。候補者は正装をして、それぞれがナイトを伴い、王城へと向かった。王城では、新しい王が選ばれ、当初の人事案の通りに、それぞれが地位に就いた。

新しい王が民衆の前で堂々と演説をしている。これからも忙しい充実した日々が訪れるのであろう。

私の館で祝賀会を開催した。エミリアも、フェルトも、アナスタシアも笑顔である。それぞれが望んだ未来を手に入れたから。

「では、私達はこれで、お暇を貰います」

と、ヤマトとファルコンがそれぞれの主君に跪いた。

「どうして?」

泣きそうな顔のエミリア。フェルトもだ。

「我々が配下になるのは、王選までの契約ですよ。お忘れですか?」

「え?! そうだっけ?」

戸惑うエミリア。

「師匠…そんなことを言わないでください」

フェルトはヤマトに泣きすがっている。

「これからは、あなた方で未来を切り開いてください」

「どうして…これからも一緒にいてください」

エミリアはファルコンに縋った。

「我らの主を、これ以上放置出来ませんので…そろそろ回収しないと」

彼らの主? 誰のことだ? もしかして、裏で暗躍してくれていたのか?

「待て! 君達の主とは、どなたなのだ?」

「我々は幽玄龍騎士団の団員です。故に主は、騎士団の団長でございます」

騎士団の団員? エミリア陣営とフェルト陣営にいた殆どが、団員らしい。



「君達の団長に会えないか？」

「逢わない方が良いです。今更、逢っても、何も解決しませんから」

「交渉したい」

「その交渉は拒否いたします」

「何？」

「一応、僕は副団長ですので、権限はあります」

と、ヤマト。副団長なのか…彼が…

「ですので、今夜を以て、皆さんとはお別れをいたします」

それは、納得出来ない。こんなにも尽力をしてくれて、彼らに礼を尽くしていないから。

「礼とかは必要ないです。皆さんが幸せな未来を迎えられることが、なによりですから。

帰還の準備を始めてくれ」

「了解！」

「どこへ帰還をするのだ？」

「答える義務は無いです」

何も答える気は無いようだ。

—— シュウ ——

監視塔つて処で、シャウラという女性からエネルギーを貰いつつ、性欲を満たしていた。

「師匠：タフすぎるっす」

「はあ？お前は僕の専用ダッチワイフで良いんだよな？」

「なんか違うっすよ」

サテラとパンドラは、図書館で読書をして過ごしていた。

「団長、迎えに来ました」

つて、漸く、ヤマトがやってきた。

「遅い！シャウラがガバガバで困っていたんだよ」

「師匠、やりすぎですつて。よく毎日飽きずに、責めまくりますね」

つて、シャウラが喜んでいる。

「で、お持ち帰りは、その3名ですか？」

「サテラはどうする？」

「着いていくよ」

「パンドラは？」

「能力を奪っておいて、放置は許せない」

「シャウラは？」

「ガバガバで放置つすか？それこそ、有り得ないつす」

「3人とも決定だな」

「で、クルシユはどうします？」

「どうつて、覚えてないんだろ？」

「ですよね…」

こうして、漸く帰還出来る運びとなった。

——クルシユ——

毎日をかむしゃらに走り抜けた。平和な世界の礎を築けたと思う。エミリアは長命種であるので、まだまだ若いけど…私は既に引退をした。フェルトもまだまだがんばっているけど…

ベッドサイドにはフェリスだけがいる。

「クルシユ様…」

私の手を握り…私の顔を覗き込んでくれている。

「いままで、ありがとう…フェリス…」

「いえ、クルシユ様にお仕え出来て、幸せでした」

脳裏で走馬燈に撮し出されるように、記憶が再生し出した。幼い時、少女期、恋をした青春時代：え?! 恋をした? 誰に? 記憶が甦つて来た。彼のことか：…なんで、今まで忘れていたのだろうか? あんなにも恋しく、愛しく想っていたのに：…涙が零れていく。「どうされました?」

フェリスが私の異変に気づいた。

「大切な人を忘れていたわ。どうしてかな：…あんなにも愛しかつたのに：…」

もう手遅れだけど：…私の命の灯火はもう、消えかけていた。

「クルシユ様だけ、行かせません。私も付いて行きますから」

ナイフを手にしたフェリス。自害するつもりか：…

バチーン!

え?! フェリスの頬を思いつきり叩いた人物がいた。えっ? 何で：…

「何をするんだ? 貴様、誰だ!」

フェリスはナイフを構え、臨戦態勢を取った。

「死神とでも、言っておくかな? クルシユとフェリスの魂を、貰いに来た。でも、自殺じゃダメなんだよ、フェリス♪」

あの人か：…あの当時の姿のままのあの人か、フェリスと唇同士を重ねた。

「えー! スバルきゅん：…どうして：…今まで、どこにいたの?」

ナイフを手放し、彼に泣きすぎるフェリス。ズルい…私は起き上がれないのに…  
「おいで、クルシユ。これからは一緒に、時の狭間を旅をしよう」

彼の手を握り、引き起こして貰うと、私の身体はあの当時の姿になっていた。彼に、手を引かれ、私とフェリスは宙に舞う。眼下には、息絶えた私とフェリスの亡骸が見えた。天空を三人で舞い、大空を駆けていく。そして、空に浮かぶお城に、吸い込まれて行く私達…